三井甲之

選集

三井甲之

選集

宮崎五郎編

三井甲之選集（第一巻）

しきしまのみち会大阪支部刊

明治四十一年

はじめに

昭和二十八年四月三日、不世出の天才三井甲之逝く。この月を中にはさんで斉藤茂吉、釈超空（折口信夫）の二歌人も逝った。この二人の全集は幾許もなくその門弟らによって立派に完成された。ひとり三井甲之にその企てなし。

没后六ケ月にしてA5版一二〇頁の追悼号（新公論第四号）が出たのも、歌集と歌碑が出来たのも、小田村寅二郎兄の秀れた政治力と、それにも勝る同兄の先輩追慕の情熱の賜であった。

全集の企劃は何回か提案したが顧みられなかった。資料も当時予感したように逸散して了った。こゝに選するものは全著作の約五分の三量と思われる私蔵のものに由る。

選集刊行の直接の提案者は細田勲次兄。それを具体的に支持して下さったのが小田村兄と小川幸男兄と木村松治郎兄と――夫々五〇部を快く引受けて下さった。印刷部数は二〇〇部。仮名遣いと一部の漢字は仮名に改めた。若い世代の人々に読んで貰いたいからである。

〝百年後に知己を求むる覚悟〟とのんびりしたことを云った先輩もあったが、それまで私は生きられない。これが文字通りこの世に於ける私の最後の仕事となったと思えば身に

余る光栄である。何もかも〝師匠のおかげ〟の一語につきる。

選者は往年の三井門下の末弟――選集は云う迄もなく選者の選択意志が加わる。それ故に、これは私の三井甲之観とも云い得よう。

昭和四〇、五、二八

宮崎五郎

凡例

文首の○印は論文相互の区劃を示し、文中の……印は中間省略を意味する。

文末の――線にはさまれた最初は標題、アラビヤ数字は発表の月（日）、最后は掲載雑誌名である。

年代は夫々の巻首に示した。因に云う、明治41年三井甲之26才、東京帝大卒業の翌年に当る。

題字は三井サンの気魂を模した編者の一筆書きである。

目次

明治四十一年　自1頁　至84頁
明治四十二年(上)　自87頁　至95頁

○

熱情のない文学はすべて淫靡である。西鶴の文学の如きも熱情がないから淫靡である。近松の作もそれである。精神が十分緊張して居れば、あらゆる行動は無意識的になって来て、実利的な利己的の考えはなくなってしまう。

元来肉欲は極めて利己的のもので、いやしくも高尚の精神を有するものは、それ以外に友誼的な、目的なき、清い愛情を要求するものである。文学という以上は気品がある感情を写さねばならぬ。気品ということは社会上の形式的地位や外観に就いていうのではない。いわゆる上流社会の生活が文学から見て高尚なわけでもなく、市井の婦女といえども文学から見て価値ある行動をなすことがある。文学の論ずべき点は決して外観の如何ではなくて、内心の感情の如何にあるかである。すべて精神が緊張しておれば他を顧みずに専心になる。すなわち疑惑がなくなる、疑惑がないから勇気が生じ安心が出来る。これが吾々の理想とする所でなければならぬ。躊躇したり疑惑に陥ったりして、種々の目的のために種々の手段をめぐらす如きは決して文学者の為すべきところではない。余裕があるというのは精神の弛緩を意味して居って、統一しないで散漫になっている時である。一心に主義のため直往邁進せずに、利害を慮って左右を顧慮するときである。悠々と天然を楽しむのも、決して飽饜（ほうえん）後の眠き眼をもって見廻したのでは生命のある文学は生れぬ。人間の実利的実地感情を忘るゝだけの強い感情が内心に籠っておらねばならぬ。

……

元来、禅の極意は動揺後の静止、節奏ののちに来る中止的調和に住するのにあるので、その外面には静止の相があるけれども、その内部の真相を観察すれば必ず過去動揺の余波と、将来開展の潜勢力とを蔵するものである。

俳句の極意は、調和の景情を憧憬し、忘我の境に遊ぶの妙趣を有するので、禅と相類する態度をとるのである。けれどもかくの如く常に転変する人間精神上の問題を、無雑作に、即興的に、平面的に、静止的に観察するときは、一方に偏倚しその一時的外形をのみ見て精神を忘れ、いわゆる野孤禅と月並俳句に堕落するのである。取りとめもない空漠な感情に耽って、その漠然たるところが即ち趣味の存するところであるように思って、徒らに繊細な軽浮な趣向をこらして世俗の目を眩せんとするのは世俗の喝采を博するだけ幼稚な趣味である。

……

文学は如何なる材料を如何に取扱うとも、必ず緊張した精神を伴わせねばならぬ。若し余祐のある態度をもって文学製作に従事したならば熱情なき文学すなわち軽浮淫靡の文学を産していわゆる月並野孤禅の流に堕落するであろう。男女の情事を写したるものを直ちに淫靡なりとなすは、自己の感情を制御する意志力なき人間のことである。熱情は一切を浄化するものである。たとえ天然を写したりとて冗漫なる余祐ある態度を以てすれば必ず淫靡になる。一草一木を畫いた畫が遊女を畫いた畫よりも淫靡なことがある。文学は材料および外観よりも作者の態度および内部の感情を重んぜねばならぬ。人生に直接ならざる

材料を冗漫に記述するときは作者は内心に起こる衝動によって製作せで人為的技巧を以て外形を紛飾せんとするから内容なき、故にいわゆる余祐ある趣味を生じ来るのである。

……

古今東西の過去および現在の多様多種なる出来事は人間の精力では知りつくせぬ結着のつかぬ智識などに囚われており驚嘆しておるようでは生命のある文学は生れぬ。一言にして云えば信仰なき軽浮なる文芸、誠実が欠けている文芸は、徳川時代以来の掛言葉、故事、洒落などを徒らに羅列し、平凡なる義理人情、立法的なる道徳に盲従したる偽善的行動、何らの意義なき些事の穿さくを事とする通、穿ちなどを写して何ら根本にこれを統一すべき思想なき文学の余弊である。

――漱石氏の低徊趣味説を難ず・2・アカネ――

○

文学哲学宗教等に関する一切の問題は個人内心の実験に到達してはじめて解決せらるゝのである。雑多なる概括的智識を有しながら実験上に何らの根柢をもたないいわゆる学者の空論は文芸を毒するもので、また真に文芸を味わむとする上に大なる障害となるものである。製作が第一で議論は第二である。議論は必ず製作上の実験から来り、また思考力に富む天才の直覚的予言によらなければならぬ。けれどもその天才は稀有であるから実験か

ら来る議論が確かである。けれども一方には確乎たる主義なしに濫作せられたものが世間に大流行を来して文芸を腐敗せしむることがある。この時には確実なる評論と製作とを以て趣味の堕落を防がねばならぬ。再言すれば文芸の評論は実験上の信仰を以て生命なき空論を破るのが普通であるけれども、今は不健全なる濫作を批評し理想を建設せむとするのである。けれども理想は実地製作を以てせなければ空論に終るから、今の論は主として非難に止めておく。

現状を理想的なりとし現状のまゝ得意になりおるに非ざれば、自然に不平がある。他人の作に向ってもまた自己の作に向っても不平がある可きが自然である。故に議論があるのが自然である。非難のあるのが自然である。非難するのを奇異に思う人があるならば、吾々はかくの如き人をかえって奇異に思うのである。この世に完全な聖人のような人間がある訳もなく、不完全の人間であればこそ文芸の必要も起こるのである。故にいま吾々は現状を悲観する態度から出立するものであるということを明言しておく。故にこの論は非難攻撃が主であるけれども、それは他を攻撃せむがためではなく自らの理想に向かって進まむがためである。

……

空想というのは直接の実験に対して云うのである。明瞭確実なる形体より発する情趣を取らずして、不明瞭なる前駆的情趣より出発してこれを描くべき形態および思想を五感に直接ならざる思考より得来らむとする文学製作に名付けたるものである。文芸および一般

の美術は人をして現実以外の境に遊ばせむとするものである。この自由なる想像に生命を見出さむとするのは文学者美術家の自然の要求である。前後を忘るゝ如き大驚喜は各人の求むるところである。けれども如何にして求むべきかと云うのが問題である。今はその自然の要求および動機について云うのではない。その実際について云うのである。主義の論ではない、見たる確実の事実より出発する論である。小児のごとき想像は美しい。けれどもその想像は現実にすることは出来ぬ。かくの如き想像はよく言語を以て写しうるかという疑問がある。その微妙なる情趣は言語によって十分現わし得るか、少くも音楽絵画などに比して文学はかくの如きさまよう如き想像の情趣を写しうるか、文学は本来他の方面に向かうべきもの、少くもかくの如き画の如き幻の如き微細なる趣味を伝うるのみが文学の本領ではないと信ずる。否、かくの如きは甚だ危険な傾向であると信ずるのである。

いま空想というのは意志より成れるものではなく、むしろ感情より成って居るものである。文学および一般芸術は努力的なる意志を断絶して無目的の境に遊ぼうとするのであるから、自然感情に耽りたがる。さてその感情の価値とこれを如何に云い現わす可きかというのが問題である。まづ言語に云い現わす上から云って感情は何らかの形体および概念がその根柢となっている。すなわち五感からの直接の印象と、その直接の印象の複合のうえに生ずるのである。だから感情を描かんとし、その微妙なる色合いを云い現わさむとするときは自然ある形体および概念をその感情の象徴としてかりて来るのである。けれどその象徴たる形体および概念には感情がくっ付いて居りはしない。その形体および概念の絵画

的配合のうえから、読者が自己の経験に対する暗示を得てはじめてかくの如きものであろうと想像するに止まって、確実な客観的価値ある作物ではなく、独りよがりの材料並列文学となる。何となれば作者が現わさむとし、また現わしたつもりの情趣は現わされずに形体および概念の死骸のみが冗漫なる句法に並べられてあるのみとなる。これは同時に象徴主義に赴く動機とその弊とを説明するものである。また感情は一所に停滞彷徨している性質のものなることは心理学的説明をするまでもない。かくの如き感情文学はおのづから力よりも外形、運動よりも配合を重んじ、その結果内部の力よりも外部の装飾を重んじ、隠れたる深き永久生命よりも一時的なる光彩の燦爛たるを求め、外形に執着するゆえ技巧的になり、根本の動機を顧みず外形の模倣に流れむとするのである。

……

正岡子規氏を吾々が偉なりとなすのはその趣味の確実健全なるのにあるのである。氏の文学が全体に客観的傾向を帯びた点がすなわち氏の文学の生命ありまた健全なりし原因であると思う。けれども人々がこの客観的態度のみを以てしては満足しなくなったのは事実で、また至当の事と信ずるのである。絵画彫刻さえも主観的色調を表現せむとして微妙なる対照と誇張と省略をなさむとする時代に、言語を以てする、従って思想を通さゞる可らざる文学において更に一歩を進めて人情の微妙不可測なる消息を表現せむとするのは至当のことである。

――　空想文学を排して日本派の将来を論ず・2・アカネ　――

○

明治三十七、八年戦役後の動揺は文壇にも及び候。一時成功と申すこと大流行を来し、成るべく早く名と利とを得むとする如き傾向文壇にも及び申候。されどかくの如きは文壇にとっては最も不健全なる傾向と存じ候。文学に従事候は畢に文学を製作しまた味わうことだけにて十分と存じ候。その上に文学を製作することによって名を得、また利を得むとするが如き傾向之あり候はばかくの如き文学の無価値にして堕落すべきは当然と存じ候。文学美術にても、専門の作者にむかって相当の敬意とその労に対する報酬とは自然に来るべく、それを求めむとして文芸に従事するが如きは愚なることゝ存じ候。また、文芸に従事せむには自己の幸福のみ計りおる訳にはゆかず、必ず自己の享楽を捨てゝ他人に楽を分たむとする態度に出でざる可からざることゝ存じ候。小生らは正岡子規氏を明治文壇に於ける唯一人なりと思い候。されど同氏の研究は明治文壇に新光明を与えたるにて、今後こそ真の研究に入るべき時期と存じ候。また子規氏の如き全く身を捨てゝ文学に尽したるものと存じ候。これを思うときは小生らも多少の困難を堪うる勇気を得申し候。この人間の一生を出来得る限り真の意味に於ける幸福に送らむとすればこそ文学にも従事するに候。されば鋭感なく、人の感情を無視し、自己の享楽のため、または名利のため他の迷惑を顧みず、他を犠牲にして利己的なる自己の欲を充たさむとする如き人々に対しては、自己の

信念をもってこれを折伏するの勇気を必要と存じ候。中心に何らの感じもなく、表面のみ円滑にして一日半日の安きを貪るがごとき態度は取らざる決心に候。利害の念を以てし、先輩後輩などの考えを以てし、種々の差別の見を以て自己を高めて喜ばむとするが如きも小生らの取らざるところに候。世俗の関係に於いては地位学力貧富その他種々の差別これ有り候へども、一度文学の楽園に遊びては一時的の世上の差別より遠離して各人、人間として心と心を以って交わり、同一の趣味を楽しみ得べくと存じ候。さるに文学に従事するものが世俗の華奢を羨望し、また同志のあいだに於いて種々の差別をつけむとするが如き傾向よろやく盛んにならむと致し居り候。小生らが子規氏を敬するは大病ゆえにもより申すべくなれど、全く趣味信念をもととして世俗外に超然たる態度をとりたる点に候。小生ら後進の者がその遺業をつぎ、更に一歩を進めむと致し候については十分なる決心と用意とを以て万難を排し猛進撃致すべき考えに候。文学の堕落は平等無差別永久の趣味を忘れて、差別的一時的の世俗の外部的光彩に眩惑せらるゝに之あることゝ存じ候。故に単に利を得むとし、また利を得る第一の手段として名を得むとし、同時に他の自己の名利をうる妨害となるべきものを消極的にまた積極的に排斥し、その結果得たる少額の金をもって全く利己的なる肉欲を満足せしめ、衣服など外部の装飾をなす位いのことに候。憐れなる人、悲しき人に同情すべき文学者が世俗の栄華を羨望し、利己的なる肉欲を文学の根元などと人の前へ宣言するが如きあきれ果てたる次第に候。

俳句は特種の文学と存じ候。時代に対する一種反動的精神より生れたるものに之あり、

徳川時代のごとき束縛多き窮屈なりし時代にあっては一種のすね趣味のもとに生れ、また太平のため人心堕落し肉欲的満足をのみ求め、淡泊なる日本人が肉欲に飽きまた意気消沈して実世間に活動する勇気もなく、人間も天地も同じように見て、こゝに努力を要せざる解脱の境いを求めるため、泥酔的無我境に遊ぶ漢詩人、半死的無我境に遊ぶ禅僧の趣味と相類する点を生じ、その結果は不真面目なる同情なき自我の念のみ強き態度となり、真摯の態度を欠くこと之あり候。故に小生らは俳句に対して十分の用意を以て研究致すべく、またこれと同時に人生を正面より研究するの勇気と意志とを以てする覚悟に候。こゝに於いてかくの如き傾向をとる世上の自然派の現在の状態に対する小生らの態度を明らかにする必要生じ来り候。

小生らは絶対的に肉欲を文学の内容とせむとするに反対するものに候。小生らの理想は文芸の最高の趣味は肉欲を超越したるところに存することゝ存じ候。されど無気力に枯木死灰的に肉欲を離るゝことも、道学者的偽善をもって表面だけつくろうことも望ましからず候。一言に申さば正面より人生に接して而かも盲目的なる衝動以上に人間の霊性を発揮せむとするものに候。過去および現代における偉大なる人格を敬慕し同時に自己の心を発達せしめむとするものに候。平凡なる人格および事件は、自然にしてまた確かなる事実に候。肉欲も事実に候。されどかくの如きものを求むとならば必ずしも文学によらずして可なりと存じ候。またかくの如き文学これ有りしならば、これはいわゆる商売文学にて本来の意義に於いて文学にはこれ無くと存じ候。肉欲の如き一時的の、無自覚的のものを描が

かむとする如きは断然小生らの反対するところに候。されど男女の恋愛を歌い、また記述することは文学の主なる内容と存じ候。自然に対する憧憬も、朋友親族の愛情も、また芸術そのものに対する愛も、国家郷土に対し、また世界人類に対し、また宇宙に対する哲学的思想も、もとより文学の内容たるべくと存じ候。されど男女の恋愛を以て最も模範的なるものと考え候。最も完全なる、最も強きものと考え候。まづ文学は生き居る人間の製作候ものなることを考えねばならず候。生き居るという自覚は恋愛に於いて最も強く感ぜらるべく候。この時に当っては、心は一つの目的に向かって集注せられ、何らの雑念なく利害快楽を顧慮する疑惑的態度なくなり申すべく、この時には肉欲などの如き利己的の考えのなくなり、または浄化せらるゝものと存じ候。個人の価値を認むるにもこれなく、単に一時の肉欲のために異性のあいだに成り立つ弛緩せる感情を以て恋愛なりと誤解し、一生高尚にして永久の印象を銘するごとき強く清き感情を味わゝず、世俗の波につれて浮沈するが如きは小生らの理想にはこれなく候。故に小生らは無目的なる、何らの結果を予想せざる、愛することのみのために愛する恋愛の如き態度をもって、人生一般にも、山川草木の自然にも相対し、自己の五感がうけうる印象の範囲において自己の心により求め得らるゝだけの思想によってここにわが心の友、わが身の同情者を見出し申すべく、死の最後まで消すべからざる強く深く清き極限なき感情を味わい度く、かくして死に候ともこゝに永久の生命は求めらるべくと存じ候。故に小生らの議論および作物の外形をもって、直ちに世俗一般の趣味と混同せられざらむを希い候。

――消息・2・アカネ――

○

元来、人間の精神現象の真相を知らずして、漫然と外界物象に対するごとき態度方法をもって人間精神に直接関係する文芸の論をなさむとするのが誤りである。一言にして云えば人間の精神現象は動いているから、常にその変化開展の径路を追うて論ぜねばならぬ。人間精神現象に対して、静止せる物体を分類する如く、簡単に余祐の有無とように分類したところで、それは仮定空想にすぎない。無常なる精神現象は、その真相を実験的に説明せねばならぬ。変化を説明すべきであって、種類を分類すべきではない。それであるから文芸の批評をなさむとするには、特徴傾向などにより名付けた色々の名を以てしても果てしがつかぬ。あらゆる人間精神現象に通有なる真理を体得したうえに根柢をおいて、確実な標準を立てねばならぬ。正岡子規氏の文芸評論もつねに種々の分類を以てして甚だ不精確のものであるけれども、その内心の切実なる実験より発したものゆえ、つねに人を敬服せしめた。そして同氏は文芸批評の標準ということを云われた。そして常に明瞭に評価をなして、それも一種の趣味あり、これも一種の趣味ありとような茫然たることは云わなかった。これは同氏に文芸上、広くは人生上に確実な信念があったゆえと思う。信念とは疑惑の反対である。複雑なる現象裡に唯一不二の点を見出したのである。故に迷わぬ、二でなくて一、部分でなくて全体を了解したのである。迂路に低徊しておらずに捷径を見たの

である。雑多の智識を捨てゝ単純なる真理を攫取したのである。浅近の世俗を遠離し深遠なる理想に住した故である。それであるから、余祐ある小説もよし、余祐なき小説もよしとような茫然たることは云わなかった。文芸の評論はその価値の高下を論ぜねばならぬ。種類の分類などで決着のつくものではない。古今東西の文学的製作は一つも同様のものはない。古今東西に同じ二人の人間がない以上、人間の製作せる文学は一つとして同じものはない筈であるゆえ、その種類などを論じておれば、一生信念は得られず世俗の波に漂わされてしまう。それであるから文芸の評論は唯一の信念によって価値の論をせねばならぬ。

――漱石氏の「鶏頭序」を評す・3・アカネ――

○

恋愛と肉欲という如き露骨殺風景なる問題を論ぜねばならぬのは吾々の悲しむところである。けれども現代の文壇に立って、吾々の主張を発表せむには止むを得ないのである。肉欲とは一種の系統に属する機能の衝動のみが烈しくなって、他の機能全体の調和的作用を妨ぐるごとき情態に達し、ついには他の精神作用をも強迫してあらゆる他精神作用を阻害するに至る情態に名づけたのである。人間に生欲のあるのは怪しむに足らぬことであるけれども、これのみが強烈になり、他の高尚なる感情、情緒、意志を阻害し、ついには肉的衝動のみにより行動するようになっては、人間の霊性は失せてしまう。すなわち肉欲と

は、肉体的および精神的機能の一部分のみが統御的情態にあるのであって、人格の表現すなわち人全体の精神生活を表現せんとする文芸の対象としては肉欲は無意義のものである。唯かくの如き病的現象も社会の事実である以上、これに対して否定的なる、或いは更に深き強き人生観の一材料として取扱うとき、すなわち作者の深遠切実な思想によって他の意義に導かるゝとき、すなわちその作の内容の一部分、一過程たるものとしては、風俗を害せざる範囲において叙述するもよかろう。けれども、一篇の骨子中心が肉欲で、一篇の人間の行動はたゞ肉欲的行動の余波にすぎぬようのものをそのまゝ写生文的に写してはたまらぬ。――　恋愛と肉欲　――

吾人の全体観念を分解して、こゝに生ずるものが言語である。吾人の意志の全体は、無言によって最もよく伝達せらるゝのである。また言語もなるべく少ない方が全体観念をそのまゝ伝達するに好都合である。詩歌小説ことゞく言語をもって表現するものであれば、この全体観念を如何に表現するかということを論ぜねばならぬ。文芸の理想は複雑なる利害関係などの実世間の迷惑を忘るゝ点に存するのである。全般を達観せずに一部分に囚われて迷っているものに、全感情そのまゝの表現を示して、差別昏迷の疑いより救い出さんとするところに文芸の理想があるのである。すなわち人格の表現は文芸の理想である。吾人の経験、智識など心的能力の全体の活きたる事実をそのまゝ表現せねばならぬ。一向専念になった時はすなわち解脱の極促である。この緊張せる、統一せる心的情態の表現が理想の文芸である。この理想的、心的情態を客観化したるものは宗教のいわゆる神および仏

である。而してこの理想的情態すなわち専念一向の分解すべからざる、測量すべからざる、名づくべからざる全体に吾人の言行を平行せしめんとする努力の進行、動揺を表現するのが最高の文芸である。中途に低徊彷徨して、小さきわが感情に耽って、差別世界の名聞利益に囚われおるものは決して理想の文芸ではない。否、虚偽の文芸である。この意味において「芸術のための芸術」といい、「無理想」というので、この無理想、無目的というのは、自然に成立せし結果に名づけたもので、若し無理想の文芸を作らむとするものがあれば、これは無理想という理想を有する矛盾に陥るので、元来、実は第一、名は第二である。名を第一にし、実を第二にするとき、文芸批評は空漠の戯論となるのである。文芸の理想は、自然にわきくる人格の全体の表現でなくてはならぬ。この全体の精神を傾注するということは、文芸および一般芸術の上にそが評価の標準たる緊密なる形式となって現わるゝのである。文芸堕落の第一の徴候は冗漫である。――　文芸の理想とは何ぞ　――

――　評　論・4・アカネ　――

○

拝啓、桜花満開の折柄、尺余の降雪を見るなど、やゝ痛快に存じ候。小生らには春とてさほどに何も感ぜられず候。甚だ不風流のように候へども外界の気候に動かされて花見などと浮かれ候は、一つは泰平淫靡なりし徳川時代の遺風かと存じ候。万葉集に於いてもそ

の天平時代の歌に於いて、それより源氏物語をはじめ徳川時代の文学に至るまで、天然の風景、気候の変化は文学上きわめて大なる意義を有し、俳句の如く季の感じの約束をもって観念融合の焦点となすが如きものを生ずるに至り候。これ大和民族固有の気質にもより申すべきなれど、また一方支那文明の影響と存じ候。また島帝国はその地勢気候みな美しき変化に富み候へば、この楽園に自然の美を賞し候はこれまた至当の事と存じ候。されど自然に対して被動的態度に出で、理由もなき楽天的態度に出づるは慶ばしきことに非ずと存じ候。日本文明の真の開展は必ず急激なる動乱ののち国民が内的自覚に達し、無極の理想に向かって憧憬し、外部にその勢力を発展せしめむとせし時代に実現せられたるものと存じ候。文明批評者は常にその結果の燦爛たる光彩に眩惑せられ、これに至る内的苦悶と開展の径路とを看過するの傾向これ有り候。現在、享楽主義の如きは決して日本国民性の真相にはこれ無しと存じ候。奈良朝、鎌倉、足利時代の文明こそ日本国民性固有の美を発揮したるものと存じ候。近く例を以てし候へば、いわゆる成功せる実業家の成功秘訣というべきことのみ盛んに発表せられ居り候。その苦心談の如きも、実は現状の自慢話の附録にて、決して真を得たるものには之なくと存じ候。さるに、新聞に雑誌にかくの如き成功談さかんに掲載せられ、一般青年の大喝采を博しおるように候。杜撰の字書の流行と同一にて、真面目の修養をなさず速成的に結果のみを収めむとし、その活動の径路それ自身に大なる意義あるを知らざるものに候。かゝる風潮は単に金銭の収得を目的とせる実業社会に向かってすら危険に候。さるを文芸に従事候ものまで仮普請的成功を急ぎ、俳人歌人の

ごとき浅薄なる駄作小説を濫作し、戦後動乱の悪風潮に漂わされおり候は笑うべきことゝ存じ候。

――消　息・5・アカネ――

○

○人は報告によってその概括的輪廓を知りたるのみにては満足せぬ。必ず不安を懐く。不安は自覚の所産である。鏡面に対して人知れずほゝえむときは女子の危機である。社会より与えられたる一般的智識はたゞちに個人の実行の動機となる。外部より得たる一般的智識を自己中心の直接の経験により、更に明瞭にせむとするは人の本能である。自覚とは誘惑に対する受動者の情態に名づけたものである。

○二者の相融合するとき、その結果は単に二者の和のみではない。新たなる第三者を生ずる。この第三者は人間の霊智である。他より直接に伝授せられたるに非ずして、自己胸中に新たに生れたる力である。この力によって人は自己直接の経験以外の経験の暗示を了解する。この暗示はすなわち誘惑である。古聖人は大なる誘惑者である。偉大なる経験の暗示を公衆に与えて自覚せよと叫ぶ。自覚とは暗示の了解である。了解は努力の動機である。こゝに多くの力が発動する。多くの力の同時に発動するとき起こるものは争乱である。古聖人は戦いを教うるものである。かくの如く努力し、争闘してこの世を終るべきか。

かく考うると一種の力が身にみなぎるのを覚えずには居られぬ。

○如何に考えても人間は醜のものである。たゞ自己を忘れたる人間だけは美である。一意専念に人を恋する人間は美である。彼はこの時に他の一切を忘れている。自己をも忘れている。自己の容色才智地位などを考えて居っては恋ではない。あらゆる心中の雑念を滅したる時はすなわち恋する時である。学あるも無きも、貴きも賤しきもたゞ恋によりて人世の迷執より解脱することが出来る。自己を忘れ、自己を捨てゝの行為こそはじめて真の意義ある行為である。僕は必ずしも男女の間とのみ云わぬ。祖国に対しても、君父に対しても、兄弟に対しても、朋友に対しても必ず全体の精神を傾注したい。人間は意気に感じて行動するに非ざればともに語るに足らない。如何なる場合にも自覚しての行為は必ず真実ではない。人間の小賢しいはからいが混る。自然の行動、自ら知らざる自然の衝動のまに願わくは一分時なりと息を吐きたい。

○差別の万物は平等の一体に帰さむがために必ずその対比者を要する。流るゝ水は不動の岩あればこそその流るゝを知り得るのである。たゞひとり身を殺して塵土と同化し去るか、或いは相愛する両者間に無差別平等の境いを見出して身を終うべきか。一身を無心の天然に托すべきか、有情の人間に托すべきか。いづれかその一を択ばねばならぬ。たゞひとり淋しき地上に彷徨して徒らに生存することは単に苦を経験するのみである。対比を求むるは対比を滅せむがためである。存在の意義を求めむとするは存在の意義を失わむとするのである。生きむとするは死せむとするのである。生を完成したるときは死である。人

の生を希うのは死を希うのである。生死は連続せる両端である。

○心は無形である。言語を発しなければ他には解らぬ。しかし言語のみが人の思想を伝えるものではない。言語以外に一層たしかの思想伝達法がある。言語は思い切った思想を伝達するには余りに露骨である。決して真実の、しかも直接の思想は言語では伝達できぬ。これを言語に現わさむとするときは必ず偽る。言語は弁解のとき、説明のときに用いらるゝ習慣があるから、切なる思いも言語で現わせば必ず偽ってしまう。言語は決して新たなる観念を伝達するものではない。言語は既存の観念に同情を寄するに過ぎぬ。言語により相了解せんには相語らざる以前から相了解して居らねばならぬ。言語は多く目的ある意志を発表する。間接なる意志を発表する。直接の全体の意志は言語では発表せられぬ。一言二言の言語は或いは全体の意志を発表することが出来よう。全体の観念を幾つにも分解して冗漫に語ったのでは人間の意志は通ぜぬ。死んだ機械の説明は多言を要する。生きたる人間の意志を通ずるには一言で十分である。いな、無言の方が完全にその意志を伝達する。人間が言語を発するときは自覚した時である。忘我の境に在って無意識になす行動こそはじめて人間の意志全体をそのまゝ最も直接に伝達し得るのである。

○下らぬことで日を暮すは真の快楽も興味も味わう力がないからである。人の苦を同情する力もなく、進んで人を苦しめて愉快がっている。人の苦を感ぜぬ人間がある故にこゝに悲劇が起こる。

○外界の雲行きのみ顧みては到底信は得られぬ。安心も得られぬ。相対有限のはかなき

才智芸能財産地位のごときものは得ざる間こそ吾人を誘惑する力がある。けれどもいちど手に握ったならば即刻その価値を失うのである。

○若いこゝろはひと筋である。清くして純粋である。若いこゝろは絶対的である。絶対的とは、それ自身に生命と目的とを有することである。他を顧みぬことである。それ自身にて完成して他を俟たぬことである。この若きこゝろの盲目的なるところはすなわち潑剌たる生命のある所以である。永久の生命とは永久の若きことである。若き時は再び来ぬ。かく思えば今うっかりしては居られぬ。詩は青年の所有である所以もこゝにある。

○なまなかの教育を以て天然の美を失った人間よりも、天然のまゝの人間の方がよい。技巧によって天然の美を失ったものは発達の見込がない。けれども天然のまゝのものには発達すべきあらゆる要素が含まれている。

○吾々は理想を描いてこれを実現したいと思う。いちど理想の実現に逢うときは再びこれを心中の冥想に復帰せしめむとする。この間に芸術は製作せらるゝのである。実世間の活動裡にのみ居るものが俗物であれば、芸術の冥想裡にのみ居るものも俗物である。空想文学、道徳文学などは主にかくの如き人々によって製作せらるゝのである。人生には動揺が必要である。変化が必要である。熱烈なる恋愛的憧憬は、千変万化する情海の一波瀾である。空しければこそ満つるを希うのである。満ちたるものは再びその空しからむを希う。絶えず進みに進む人間こそはじめて芸術を解し得るのである。

○現代の皮相的文明の群衆より逃れて自己心中の世界に帰り来ったとき、はじめて芸術

は生るゝのである。雑色の現世を自己心中に漉過せしめて単色に純化したるものが芸術である。芸術は簡単と統一とを要する。芸術は個人の自由を標榜せねばならぬ。伝説は直ちに芸術ではない。これに個人の生命を与えてはじめて芸術は製作せらるゝのである。個人の威厳はたゞ芸術によってのみ保たるゝのである。宗教は万人に強うるに同一の形式を以てする傾きがある。宗教はその開祖と改革者との手にある間は詩である。その後継者の手に渡りし時は社会の所有となる。教義は法律となる。末世に栄ゆる宗教は個人の威厳を没して俗衆に媚ぶるものである。生命を失った形骸である。個人の威厳は恋愛によって極度に発揮せらるゝ。こゝろを一点に集注するときは、あらゆる他を忘れて居る。一切他を顧みざる時、はじめて十分に自己を発揮し得るのである。祖先および社会とのあらゆる係累を絶って現在の自己の全力を使用する時はじめて十分の自覚に達した時である。十分の自覚に達せむには自己のこゝろの真像を他の胸中に見出さねばならぬ。暗中に唯一の光明を見出したる時である。暗窮まりて見出したる光である。

○文明は決して願わしいものではない。破壊！今日の文明は或る程度までその堕落的発展をなす。こゝに於いて堕落暗黒の極点に達して個人の生命は全く失われむとするに至って、はじめて一道の光明が輝き来るのである。第一には精神上の革命である。第二には政治上の革命である。破壊は新たなる生命の母である。人を救わむためには自己を殺さねばならぬ。自己の精神を救わむためには自己の肉体を殺さねばならぬ場合がある。幾多義人の屍はかならず個人の自由のために野に曝されねばならぬ。

○現実の無常なる境遇運命を破るの力はすなわち愛の力である。愛の力はすなわち運命を破る力である。他を殺すの力である。自ら殺すの力である。至高の理想を実現せむとするのである。至高の理想はたゞ死によってのみ実現さるるのである。一度死して再び生るゝところに真の生命がある。一度死したる者は聖である。

山中に世を逃るゝは世をいとう故である。世をいとうは世を楽しまむとする故である。冷たき外面の根柢に循環する暖かみに触れむとするのである。静座黙想するは無形の大活動、人間五感の認識以外の現象に感応せむとするのである。僕は過去を思うとき、過去を顧みるとき、理想は地上に於いては滅ぶべきであると信ずる。永久の生命を得んためには地上に於いては滅びねばならぬ。

―― 小説　行く春（上篇）・6・アカネ ――

○

○現在の一瞬はたゞちに過去の一瞬となる。無常は世の真相である。短きは一日半日の生命を以て死ぬ生物がある。死したるものに向かってはその一日半日はすなわち永劫の生命である。死したる、滅びたるその一端を手探りせよ。得るところは空である、滅である。見るべからず、聞くべからず、触るべからざる絶対の境である。始終なきものそれ自身である。一度この境に心身を没し去って、更にまた無常の人世を回顧すれば人世もまた絶

対不可思議の境に没了するのである。満腔の熱情をもってかくの如き大歓喜を味わうべく僕のこゝろは自然に動く。

○都会に居れば自然気が忙しくなる。同じ場所に同じ事をしては居られぬ。変化を求むる。変化は万物のひとしく受けざるべからざるものである。変化し易ければ軽薄となる。けれども変化せざるものは必ず死す。自ら死なざれば必ず他を殺す。

○人格の価値は境遇や教育を以て上下することは出来ぬ。成功して心を空虚にせむよりも失敗して心を満足せしめたい。生きてはかなき世を送らむよりも死して永久の歓喜に入りたい。

○あらゆる紛乱は個人に達してこゝに解決すると思う。宗教の争いは個人を忘れたる民衆の堆積と自覚せる個人との対抗に外ならぬ。

○毎日失敗のみしている。失敗後悔慚愧、かくしてその日を送ってゆく。しかし最后の失敗はないと。この一念はすなわち「信」である。運命は残酷であれ、境遇は不如意であれ、煩悩は強くあれ、他人は不親切であれ、されど真実のこゝろは必ず勝利者である。身は死するとも、世は滅ぶるとも、真実のこゝろとこゝろとは決して滅びぬ。絶対の事実である。存在である。存在せる活きたる力である。あらゆる現象の根源の力である。この力を信ずるのみである。信の一念はいま僕のいのちである。

○人間は恋を解するあいだが生命である。意気に感ずるあいだが生命である。人を買いかぶるあいだが生命である。一利一害、一長一短、折衷妥協、穏健寛容等はうちにさもし

き小我を潜めて無気力の外部を塗抹するの虚飾語である。自己の価値以上に自己を人に思わしめむとするのは、自らの心を好んで空乏に導くものである。一切の万物は自己に適する他を得んとして居る。自己に相応なればこそ互いに相近づくのである。他と一致し、他と接近し、他と同情し合うは、自己を豊富ならしむる所以である。自己を偽って自己と不相応なる他を希求するのはついには必ず馬脚をあらわすのである。

――小説　行く春（下篇）・7・アカネ――

詩人の生活と製作

詩人はその実世間的生活を直叙しなければならぬ。直叙して詩になるのには、その実世間生活それ自身が直ちに詩であって、その人の口から自然発したものが詩でなくてはならぬ。詩を吾人の実験以外に求めむとするのは詩の堕落の第一歩である。天才の実験は常人から見れば空想とも奇蹟とも見えよう。けれども天才にとっては確実な実験である。常人が技巧を以て自己の実験の以外の微妙の趣きを求めむとする故、技巧的な、煩雑な、虚偽な、浮薄な空想文学が生るゝのである。

実世間的生活を直叙すれば肉欲小説になるような人が殊勝にも詩を作らむとするとき必ず虚偽な技巧的な詩となるのである。彼らの生活は詩ではない。詩人たり得るだけの強い情緒も意志もない、力のない、深い濃い、しかも一定した情趣のない、動揺も波瀾もない、

肉欲的な、獣的な生活に耽溺して居るものも、詩を作ろうとする時には、その実験が詩的でない故、こゝに技巧と修飾とを以てひねくりまわすのである。月並俳句、空想和歌、骸骨新体詩はかくの如くにして製作せらるゝのである。若しかくの如き詩歌を美なりとするものあらば、彼らは売女の媚を美とするものである。

不自然な、技巧的な詩歌は、天才の真似をする凡人によって作らるゝのである。凡人をしてかくの如き自惚を起こさしむるものは平凡なる批評家と愚なる公衆の喝采である。更に下っては一行一頁の原稿料である。

さて大天才は稀有であり、またその天才があってもこれを十分発達さするようの境遇は更に稀有である。それ故資性の高下を論ずるよりも、まづ着実な、真面目な、真摯な信仰的態度と、男子の意気とを以て居るのが詩人たる第一の資格である。詩人が現世的権威に屈服するときは月並になるときである。世間の大家などには真に詩が解らぬ故に大家になって居るものが多い。それ故世間一般の風潮に反抗するところに詩の生命があるので、詩は必ず破壊的、革命的な傾向を以て清新なる内的経験を歌わねばならぬ。故に師長の庇護に名を得たる実力なきものが僥倖し得たる地位を失わむを恐れ、或いは利欲の念、名誉の念がその節操を脅かさむとするに至る老人またはいわゆる先輩らは詩には無縁のもの、否詩を堕落せしむるものである。畢竟、詩は青年の所有である。少くとも青年のこゝろを失わざるものの所有である。

一般文芸評論の害毒

学問は必要であろう。けれども学問の終極は学問というものは畢竟役に立たぬものだという事を知るために必要であるのであろう。これは必ずしも学問に限らぬと思う。一切のものその真相のついにはつまらぬものであるということを知った時、はじめてそのものの真価値が発揮さるゝと思う。故にいわゆる美学者の論の如きは美術家から見れば随分迂遠のものである。それゆえ美学の如きも随分害毒を流して居る。何となし美といえば空想的なものゝ少くも特別のものであるように思わしむるのである。また美、壮美などの分類を以てして美に諸種の区別ある如くに教うるのがいかぬ。或いは俳趣味とか何趣味とか特別の趣味があるように思うに至って芸術は堕落するのである。すべて差別に囚わるゝ位いならば文芸は無用のもので、差別の迷いを醒すところに芸術の生命は存するのである。それ故美といえば特別のものと考えて、或いは白粉を施し、ごてゴてした装飾をなし、或いは流行と称して化物の如き服装をなしたるものを美と見る市井の俗人の如く、真実の感情を偽り、人真似をし、外見をつくろい、心にもなき言語挙動を空想してこれを美なりとなすのである。けれどもかくの如きものは決して芸術の理想ではない。

芸術の受くべき制限はその芸術の種類すなわち方法に存するのであって、決してその内容に存するのではない。一切の芸術は同一の動機から製作し演じ得らるゝのである。たゞ絵画彫刻音楽詩歌等の形式および方法によって制限せらるゝのみである。故に芸術評価の標準は唯一でなくてはならぬ。この一事は正岡子規氏の文学の上に事実として示されて居

る。

また芸術の一切が同一の標準を以て評価せらるゝ如く人生上の一切の問題と芸術ともまた同一の標準を以て評価し得るのである。宗教も哲学もその他の精神科学および自然科学の終極もまた同一の原理によって解決せらるべきであると思う。

強いて美ならしめむとするのは美とは如何なるものであるという先入の偏見を有して自覚的に振舞うのである。すなわち美たらしめむとするのは美を失う所以である。吾人が明星派の歌を非難するのは此の所である。その他一般の空想文学を排するのもこの故である。芸術の終極は無目的、無自覚に達して自然に帰るところに存するのである。故に芸術の要義は煩鎖なる分類の論でなくて唯一人生の帰趣の根本問題に存するのである。それ故芸術は飽くまで真でなくてはならぬ。自然でなくてはならぬ。けれどもこれのみでは満足できぬ。

芸術は意志力の表現なり

種類の問題でない。質の問題である。強度の問題である。開展の問題である。同一根柢の上に立ちての程度の問題である。比較の問題である。吾人は見聞の感覚世界の差別を認むるのである。けれどもこの差別は同一平等に至るべき道程にありて、その平等の理想境よりの距離の長短によって、換言すれば理想境に向かって運動する速力によるのである。途中に低徊彷徨して居るものと勇猛精進するものとの差である。この開展の努力を物質的施設あるいは金銭の額などを以て表示し得る程度のものは文芸として現わるゝ価値がない。

それ以上の努力は必ず芸術の形式によってこれを表示せざるを得ないのである。これ高尚なる人間が芸術に向かう所以である。この時にその意志力の強さは芸術の形式の上に形を取り来って高尚の芸術であるだけ緊張せる、興奮せる心的情態の表現に適するよう引締った強い形となるのである。

人生から吾人の意志を取り去ってしまえば人生も宇宙も無意義となってしまう。一切の他は自己と何らかの関係ありとして見ればこそ意義が生ずるのである。すなわち吾人の意志と関係せしむる点に於いて意義を生じ来るのである。かくの如くして吾人の意志は直ちに宇宙であると云える。この吾人の意志を客観化したものが芸術の作品である。さてこの意志力の強さを増し来った終極は何であるかというに——死である。この以上は言語を以て説明することは出来ぬ。自覚を失うのである。自然に帰るのである。差別の肉体を滅して平等の霊界に帰するのである。故に悲劇哀歌は芸術の極点である。悲劇によってはじめて最高潮の意志力が表現せらるゝのである。こゝに吾人は悠久な感に心を酔わしめ、人生の差別を忘れ、天然に同化する思いをするので、こゝに於いて実世間活動の勇気を得来るのである。

芸術は極端なるべし

故に中庸を得たるものは決して芸術ではない。必ず極端に走せねばならぬ。過激でなくてはならぬ。生命を賭しての事業でなくてはならぬ。真面目な、切実の事業でなくてはならぬ。決して娯楽の方便ではない。徹底せねばならぬ。邪疑を決破し、魔境を貶し、一心

専念、遠見遙聞の徹鑑力を希求せねばならぬ。ひとたび自己の信念に迫害を与えむとするものあらば酬ゆるに血を以てするの覚悟がなくてはならぬ。芸術は架空の談話ではない。活きたる人間の言語動作である。人生は決して美しいものではない。醜悪を極めたるものである。無常のものである。苦痛憂患に満ちて居る。この間に立って自己の威厳を保たむとするものは必ず奮闘せねばならぬ。この義人的努力を表現するものが最高の芸術である。或いはこの努力を正面より描写し、或いはこれを暗示するものである。

排自然主義論の無意義

現代の自然主義派の作物を批難するのはよい。けれどもその主義傾向を批難し、浅薄なる真善美などという哲学論やら道徳論やらを以てし、又は空想文学を以てする如きは愚の極である。何ら積極的方針を示さゞる論はみな空論である。

文学史上の不朽の作の如きはみな作者実験の告白であって、下らぬ空想文学などは一時の流行の後に消えゆくものである。その時代および作者の人格によって諸種の文学が生るゝのでみなその当時にあっては時代の思想の先駆者であり、現代に於ける偉大なる精神の表現である。流派といい、主義といい、作者の人格、時代の趨勢を外にして論ずべきではない。殊に文芸の門外漢が平凡なる常識主義に基く立論の如きかたはら痛いものである。

時代は推移せり

文芸に対する真摯なる態度と修養とのなき門外漢の文芸に容喙すべき時代は去ってしまった。骨董を玩弄し、門弟を集合し、新教育のなき貧乏な智識を以て風流だの、趣味だの

と云い居る時代は去ってしまった。新時代のものは或いは粗雑生硬のものが多かろう。けれども旧時代の死骸の整然たるよりも勝っている。けれども旧時代の人が新時代の風潮を真似るのはいかぬ。殊に趣味といって多少の漠然たる感情上に修養があるとしても、今日は思想と感情などを分つようの時代ではない。交通機関の急速の進歩は世界を一点に集注するほどの勢いである。少くも思想界に於いてはそうである。その上に旧時代の覆面は全く取り去られて人生はありのまゝに露骨に吾人の観察するに任せられて居る。豫言者の時代は過ぎてしまった。現実の活きたる事実の上に立たねばならぬ。実力の上に立たねばならぬ。しかも科学的の精確を以て事に臨まねばならぬ。不得要領、迂濶などを以て風流と思って居るようの時代は過ぎてしまった。哀むべきは旧時代の人、前世紀の遺物たる人々である。

将来の和歌

和歌は元来抒情詩であって、詩として最も原始的の、最も単純な、最も純粋のものである。近世的の思想を歌うならば長詩を研究すべきである。明星派の短歌の全く無意義なのはこの故である。されば和歌は青年の作るべきものでなくて老人の旧思想を歌うべきものであるかというに決してそうではない。単純と云い、素朴と云う、みな青年にして能くするもの、少くも青年の心を有するものにしてはじめてよくするのである。和歌に詠ずべき単純というのは、強烈の感情の潜んでいる単純である。複雑なる雑念を減して一向専念の信仰的情緒を起こすほどに強く感じ、浄化されたる思想感情を歌うべきである。単純のあ

りのまゝの感情に直接な内容を歌うべきで死に瀕したる老人の無気力の単純ではない。和歌は必ず微妙なる節奏を要する。節奏とは青年の脈搏である。

挑発的文学

文学には崇高なる威厳を要する。吾人の区々たる感情意志を断絶せしむる如きものでなくてはならぬ。吾人を迷執より解脱せしむるものでなくてはならぬ。世俗の趣味は常に崇高より離れて挑発的に傾いて居る。崇高の反対に無気力、部分的、人工的、斑色的にして極めて小規模の趣味に堕落して居る。今日社会一般の風俗がみなこの方向を取って居る。衣服装飾より建築に至るまでみなこの風俗を表示して居る。この趣味を一言にして云わば淫靡趣味である。空想趣味である。確実でない、意志の弱い感情に耽る、利己的な、最も悲しむべき趣味である。この趣味は又は花柳趣味、幇間宗匠趣味、賭博趣味、侯奸趣味、小人趣味となって社会に諸種の形をとって現わるゝのである。

淫靡堕落を極め、人間を土偶化せしめむとする旧演劇は徳川時代の挑発趣味の代表で、滑稽なる空想を真面目くさって演じて居る新演劇は明治の挑発趣味の代表である。現代の劇などはその芸術的価値は活動写真にも及ばぬ。殊にいわゆる新派壮士芝居と称するものゝ如き、幻灯でも見るような、薄暗いジメ〳〵したものである。

現代の趣味の堕落は不確実な、力の弱い点にあるので、この淫靡なる趣味はまた文壇にも現われて居る。一つは冗漫なる空想文学、一つは野卑なる肉感描写文学である。空想文学とはいわゆる低徊趣味で、極めて幼稚の、時代後れの趣味である。この空想趣味が俳句

に現わるれば月並流の句となり、歌に現わるれば明星派の歌になり、小説に現わるゝと繊細な、冗漫な、衒学的の低徊趣味小説となるのである。要するに深刻でない、強烈でない趣味であるから、区々たる感情を刺戟するに止まって、決して忘我の大驚喜に導くものではない。かくの如き趣味は極端を恐れ、苟安を貪り、小我見に執し、感情の小売をなす現代の多数の人々の喝采を博するのである。浅薄なる都会趣味、迂濶なる衒学趣味の所産である。これと同時に一方浴場を描写するが如き肉感描写を事とするものがある。空想低徊趣味の者が人生に触れゝば必ず肉感描写をなすに至るのは自然である。何となれば、絶対の、徹底した、深刻の感情を味わう能わざる低徊趣味者は常に余祐ある、切実ならざる、閑居的心的情態にあるゆえ彼らの目に映じ来るものは必ず部分の美である。材料の美である。個々の現象を統一することが出来ない、すなわちその心的情態に山がない、唯一優勢の情趣がない、すなわち信仰がない。それ故ひとたび人間に触るゝとき、その人格全体を観察することが出来ないで、その肉体的各局部を観察するのである。或る情趣が胸に湧くまえに部分的固形物が目に入ってくる。それ故彼らは直ちに浴場の描写の如きを無意識になすのである。彼らの文学は自己胸中の信仰から湧くのでなくて、外界現象の配合組立より成るのである。故に混雑し、無統一になり、之に加うるに冗漫に失するのである。簡潔という如きは決して彼らの解せざるところである。その肉感描写が醜感を起こさぬのはその技巧が足りぬからである。

空想的楽天的批評家

西洋人は大抵その国語が読めるであろう。けれどもみな文学が解りはせぬ。こんな事は云うまでもない事である。日本人が外国語学の初歩と外国文学の初歩を習った位いのことで文学が解るものではない。之に加うるに日本語、日本文学および日本の思想史に対して何らの研究もないものが日本文学も解ろう筈がなし、また従って外国文学が解る筈もない。日本文学が解らぬ日本人には外国文学も解らぬのは勿論である。現代の詩人と云い、批評家と云うものの大部分は、和歌と俳句を知らない。英詩人として有名な野口米次郎氏も英詩は解るであろう。けれども野口氏より一層よく英詩を解し、また一層勝れた作をなし得る英人は多いであろう。また野口氏の英詩界の地位は、同氏が日本人であり、日本趣味を有するゆえに得たのであろう。さて同氏は日本趣味、日本文学を如何に解して居るか。吾々は同氏の百人一首の英訳なるものを見た。若し同氏が百人一首を文学的価値ありとするならば同氏は真に日本文学を解するものではない。また同氏は俳句についてその「細み」などいうことを云って居ったように思う。これは俳句の真の趣味ではなくて、俳句に対する同氏の任意なる、また偏見に囚われたる感想に外ならぬのである。必ずしも野口氏のみではない。有名なる大町桂月氏も晶子女史の「大仏は美男におはす夏木立かな」という歌を賞賛して居る位い和歌に対して幼稚である。帝国文学の橄欖子の竹柏会歌集玉琴の評に、橘糸重子の歌

いくとせを包むに馴れし我涙はかなき事にふとこぼれぬる

という歌を切実、まことに情感を動かすものであると評して居る。こんな歌で情感を動かして居るようでは甚だ心細い。かくの如き事実は実際あろう。また甚だ悲しいことであろう。けれども作者は事柄の概略を報告するのみで、この歌には少しも調子の美がない。余りに露骨でよそ〳〵しい云い方である。元来このような種類の歌は作者が実験から作ったのであろうか。恐らくは空想で作ったものであろう。「我が涙」で切って「はかなきことに」とへだてて最后に「こぼれぬ△△る△」など随分余祐のある緩慢な涙のこぼれ方である。痛切の感情はもっと感情に直接に歌わねばならぬ。かくの如き説明的、記載的の混雑した、統一のない、情趣の色合いのない、融合しないでバラ〳〵の歌が文学的価値があるならば、勧工場も美術館と同じになる。作者はいつこの歌を作ったのであろうか。涙がこぼれた時に作ったとすれば女性としてその時にそのこぼれた涙を「いくとせを包むに剛れし」と説明するなど甚だ殺風景である。その時の光景、その時の心持をそのまゝ詠むべきである。また後にて作ったとすればこの歌では少しも相応しない。この歌は全く空想から作られてあるのは明らかである。実験としたところでその感情の色も香も失せて概括的事実となって作者の胸中に残っているものを歌ったに過ぎぬ。かくの如き純抒情詩的内容を思想的短詩を作る如き方法を以てするのは作者に誠実がない故である。空想の歌も、思想的哲学的の歌もよい。思想的内容を歌うならば必ずしも作者の心の直接の流露でなくてもよい。全く観念の交錯を以てしてもよい。けれどもこの歌の如き抒情詩的内容を歌うに、こんな余所々々しい態度はいかぬ。また同氏が評して「それ〴〵興味を蔵して居る」と云える片山

広子の歌

君が涙ぬぐひまつりて人の世に生れしはえを悟りぬるかな

そういう事実を実験したのであろう。けれどもそんなことをこう明らさまに歌うものではない。男の涙をぬぐうたとしても、その事件をこう哲学的に批判してしまっては趣味はなくなる。こう哲学的に云おうとならば、純抒情詩的に「君が涙」など云わねばよい。「男の涙」とでもするがよい。「人の世に生れしはえを」などと考えながら男の涙をぬぐうのは滑稽である。これに加えて「はえを悟りぬるかな」など益々ひどい。かく心に直接でない歌い方をしようとするには、もっと強い、清い、深い思想と感情とを要する。平凡のことを事々しく云うのを厭味というのである。吾々は殊に女子がこんな無遠慮な、無作法の歌を作ったと思うと嫌悪の情を起こす。お世辞の世の中でも堂々たる帝国文学記者たるもの、少し考えて批評したまえと云いたくなる。

――文芸管見・8・アカネ――

○

一、生死苦楽の問題

一切の生物は自己の存在を保たむとする如く他者に対して運動す。自己と比すべき他なくば自己の存在は無意義なればなり。されど存在を完成したる時は死なり。生きむとする

はすなわち死せむとするなり。希求の対象を得たる時は自己の存在を完成したる時なり。この瞬間吾人は自己と他とを二なりと感ぜず、全く一となり、差別を滅したる時なり。すなわち存在の意義を失いたる時なり。自我の意識を失いたる時なり。人の生を欲するは死を欲するに外ならず。吾人は無意識の悦楽を得むと欲して活動し居るなり。生と死とは別種のものに非ず、連続せる両端なり。苦と楽とは一を捨て去って他を得べきものに非ず。苦と楽と、生と死と、みな同一の事実に向かって異りたる見地より命じたる異名にすぎず。

故に生は苦なり。何となれば吾人はこの真理に反対なる豫想をなして、消え去るが故にこそ歓喜はあれ、その歓喜の常住ならむことを欲す。故に豫想は事実として継ぎ起こり来る感情と矛盾す。この人間の迷いは吾人の生の限り因果相続して底止するなし。

試みに思え、指頭を傷けてはじめて指の存在を強く感ず。精神的力のみならず、物理的力も障害にあうてはじめて外に発す。障害に屈せず、追求の念燃ゆるが如く、人為的拘束を破りて猛進し、指頭まさに美果に触れむとす。この瞬間は実に解脱の瞬間なり。まさに得むとする激しき豫想はかえって現在空虚の感情を激せしめ、欲求の心的活動最高度に達せむとする瞬間なり。この瞬間いまだ満足の休息なく、失望の昏迷なく、主客彼我の差別滅せむとして未だ滅せず、精神力の興奮緊張その極に達せむとして、人為的拘束氷のごとく融け、人間精神本来の活動を現じ来る時、身にも心にも溢るゝ思いを自ら堪え、夢と消ゆるはかなきこの一瞬に至る道程を冷やかに観察し、その過ぎ去りやすき大調和の一瞬に永久の生命を与うべく、言語によりその心的経過を客観化せむとする自然の要求を感じ来

る能力を有する天才をまちて、詩歌はこゝに作らるゝものなり。

二、無常なる解脱の一瞬間

吾人をして更にこの間の消息を詳述せしめよ。

この瞬間吾人は宇宙を統一せられたる完き一つとして感得す。強烈なる精神力が外界運命を征服したる時なり。詩歌は自然力に対する人間の凱歌なり。大宇宙を吾人の胸中に見出すなり。

しかれどもこれ反省の結果その然るを認むるものにして、直接にその心的情態を験すれば、前述の如く全く因果関係を超絶したる自由奔放の精神活動なり。かくの如き精神活動を「無目的なる」或いは「直観的」などの形容を以てあらわさむとするなり。吾人はこの瞬間に於いてのみそれ自身に目的ある観察思考行動をとり、万象を統一的に感得するの快感を得べし。然れどもこれ実に過度の一瞬間にして、これに次ぐべきは沈静弛緩の心的情態なり。この過ぎ去りやすきに名づけて審美的仮感とは云うなり。物質と形式、現実と理想、現象と本体などは吾人がかくの如き感情を経験したる事実を追想して客観化したる諸概念にすぎず。

この解脱の感情は最も短かき継続を有す。何となればその精神活動の速力最高度に達したる時なればなり。この最も無常なる強烈の感情の裏には、悠久無為の感情電光一閃し来らむとす。

然れども、これ吾人がその精神活動を肉体的行動に表現せずして、心中の黙想に解脱の

活路を求めむとする冷静なる反省によるに非ざればこの間の消息を解すべからず。何となれば肉体的行動によりてその感情の解脱を求めむとせば、その行動は自然なれども、反省し、自覚するの余祐なければなり。すなわち不自然なる行動、障害ある境遇のうちにありて、精神的に自然なる行動を起こし得べき力を潜ましめて、自発的なる心よりの叫びによりて感情を解脱せむとする時、はじめて詩歌製作の衝動起こるなり。故に詩人は過去の夢の如き、酔えるが如き、絶対的なる印象を喚起し来り、目を静かなる天然に放ち、思いを自己の経験にめぐらし、復活し来る自己心中の経験を、これに適応する言語により模写したるものすなわち詩なり。

三、文芸の客観性

この製作をなす場合の反省の精神作用は詩歌の客観性を有する所以にして、宗教の全く真摯のみを求むるに対し、文学および他芸術の、時に遊戯的傾向をとることある所以なり。故に喜劇的文学と悲劇的文学とはその根本を異にせるに非ずして、全くその製作し方の比較的直接の反省によると、比較的間接の反省によるとの差にして、喜劇的文学の智に傾き哲学的となり、悲劇的文学の情に傾き宗教的となり、前者の自然派的写実的傾向をとり、後者の理想的神秘的傾向をとるは、みなその製作する時の反省の直接なるか、間接なるかによるもの、決して別種の内容を有するものに非ず。

四、言語による芸術的表現

吾人は哲学的冥想或いは理論より立論するものに非ず、日本固有の和歌俳句の研究製作

を中心とせる一般詩歌の研究製作の実験の根柢に立つものなり。故に論の詳細に進むにしたがい、和歌俳句の論に入らむとす。故に製作当時の反省の直接なるか、間接なるかについて詳述せむとするは、和歌俳句比較研究の上に必要なればなり。元来詩歌はある心的情態を言語により表現して、はじめて意義あるものなり。故に如何なる詩的なる心的情態も、これを言語により表現せざれば詩としては無意義なり。この心的情態を言語により客観化することは詩歌の客観性を有する所以なれども、詩歌は常に読者をしてある実在を想起せしめざるべからず。故に哲学の如く、一般的概括的真理を教うるものと区別せざるべからざると同時に、単に内心の経験を生命とし、経文その他はその内的経験すなわち信念の符号としてのみ意義を有し、実世間的活動を主眼とする宗教とも区別し、絵画に於ける形、色の如く詩歌の言語組織の上に客観的価値を与えざるべからず。元来言語は実在的像を直覚的に表現する能わざれども、概念の配合、排列はある程度まで実在的像を描き得ると同時に、言語はその音楽的性質により、心的経過の最も直接なる模写をなし得べし。故に文学は哲学と宗教の間に、また芸術相互間に於いては絵画彫刻と音楽との中間にその位置を占む。わが国詩歌に於いて、詩歌中の両極端を代表するものは和歌と俳句なり。

五、製作的反省の心理的説明

吾人は再言せむとす、俳句和歌の内的区別は、その表現法すなわち製作時の反省の直接なることの度によるものなり。この反省なる概念を心理学的に説明すれば、吾人の心的活動漸次活潑になり来り、はじめの差別を認め、意識を有せる節奏的感情次第に活動の極限

に達し、こゝに感情の運動に主観的障害起こり、殆んど無意識なる調和の感情来らむとす。この禁欲的なる無意識の瞬間すなわち自己を忘れたる瞬間に、吾人は外物を直接自己と関係なき見地に於いて観察し、外物相互の関係の真相を認め得。かくの如き調和の感じをこれに適応すべき外物の配列、配合によりて客観化せむとする、すなわち作物を一瞥して直ちに調和の寂滅的、禁欲的感情を起こさしむるように製作せむとするを比較的間接なる反省と名づけ、なお自我意識を有し、差別を認め、活潑に振動しつゝ進行する節奏的感情を、これに平行する言語の節奏により模写し、次ぎ来るべき感情をばこれを言外の余韻に托せむとするを比較的直接なる反省と名づく。しかして両者間諸種程度上の差別あること勿論なり。

六、詩人特有の心的経過

次に吾人の云わむと欲するところのものは、詩歌製作の衝動を感じ来る心的経過は決して普通の情態にあらず。必ず異常の心的経過なり。故に詩歌は日常の現象にあらずして全く稀有の現象なり。故に詩歌の研究は普通一般の智識にては成功する能わず。故に詩歌の研究には病態心理学研究の如き用意なからざるべからず。

すなわち心理的要素それ自身異常なる性質を有するのみならず、その要素の結合法また異常にして、純粋なる回想観念を直接経験のごとく客観化することは詩歌製作者の欠くべからざる能力と認むべく、従いて再生的要素異常なる強さを有し、現実直接の刺戟より起こる観念を変形せしむることあるは自然にして、これ詩人の思想行動の常規を逸する所以

なり。また観念融合の力強烈なるを以て、観念融合の結果生ずる感情はつねに両極端に飛躍するを自然なりとす。理解もいつしか想像におもむき、更に全く受動的なる観念連合にいたり、狂人の固定観念により拘束せらるゝが如きに類するに至る。然れども詩人は狂人にはあらず。自覚しつゝ異常なる心理作用を起こしこれに堪えてみづから冷静に自己を観察する精神力を有する偉人なり。詩歌の生命は異常なる、強烈なる精神力にあり。差別と平等と、努力と無為と、飢渇と満足とを結合する精神力にあり。

故に詩人をもって空漠なる感情に耽るものとなすは大なる誤解なり。元来感情はその自己生存力薄弱にして、かつ不明瞭なるもの故、これを説かむとするや、思想の内容をかり来らざるべからず。すなわち観念の結合をもって説かざるべからず。故にその結果は観念の並列となり、作者の有する夢のごとき感情は少しも言語上に表現せられざるに至る。故に吾人は一層発達したる意志活動をもって文学の主なる内容となし、感情はその結果または前駆として起こり来らしめざるべからず。

この意志作用は心的現象の出発点にしてまた帰着点なり。感情、情緒というが如きは、心理学的解剖の結果の名にして、実在としては意志作用が最も模範的のものなり。故に吾人は感情、情緒の意志に発展する経過を写して詩歌を得ざるべからず。すなわち製作によりて感情の解脱を求めざるべからず。換言すれば、製作は製作せざるを得ずして迫られて製作するものならざるべからず。詩人が自己中心にのみその友を見出さゞるべからざる時はじめて真の詩歌は製作せらるゝなり。故に詩歌作成は任意動作、撰択動作にあらずして

衝動々作たるべきを理想とす。すなわち従属的動機自然に消滅し、唯一なる動機により定められたる意志動作なり。然れども詩歌製作は肉体的行動には非ざるを以て、飢えたる犬が肉に走るがごとき簡単初歩なるものに非ず。非常なる実世間的修養の結果ふたゝび小児の自然にかえりたるものなり。すなわち任意動作、撰択動作の反復により漸次に機械化せられたる動作なるが故に、反射的にしてしかも目的に適いたる動作なり。故に詩歌製作は能動的感情の受動的感情にうつりゆく間になさるゝものなり。而して喜劇的、智的文学は主として能動的感情を過重し、悲劇的、情的文学は受動的感情を主なる内容とするに至る。文学的製作物が吾人に与うる効果は製作物それ自身に現われたる心的現象のみより定めらるゝものに非ずして、これに続き起こり来る心的現象との和なり。故に吾人は異りたる方法によりて同一の効果を得べし。これ各芸術の分るゝ所以にして、また芸術中に各傾向の生ずる所以なり。故に吾人は和歌と俳句とを比較研究し、または和歌の変遷を論ずるに当り、その外形および表現法の差を認むるとともに、詩歌としてその根柢を同じうするを認め、互いに相交渉するところを究めむとす。

七、視　官　聴　官

視官と聴官とについて観察するに、吾人が空間および時間的表象を作るに二者の助け合うは云うまでもなけれども、また二者の間の差別は十分に研究せざるべからず。視官は能動的にして、開閉自在にしてその生理的刺激は割合長く継続し、化学的変化を生ず。聴官は受動的にしてつねに開放せられ、こゝに起こる生理的刺激は物理的にしてその間変形少

なし。故に視官よりは能動的感情を起こし、聴官よりは受動的感情を起こすが如き印象を得。抒情詩的、悲劇的文学が音楽的となり、叙事的、喜劇的文学は絵画的に傾く。近世西洋に於いては絵画彫刻は形体を捨てゝ詩趣を憧憬し、文学は抒情的音調を捨てて絵画的描写をつとむるに至れり。勿論同時に相反する二傾向の存在するは明らかなる事実なれども、顕著なる一般的なる現象について云うなり。この傾向は支那を中心とせる東洋芸術の特色にして、支那文学の内容濃き象形文字なることと、支那絵画の技巧が十分なる写生をなし得ず、殊に人物を描いて直接なる情趣を表現する能わざるが故に、風景を描いて或る情趣の符号となさむとし、筆力気韻を重んずるに至るはその主要なる原因ならむ。漢字を混用する中古以来の国文は能動的なる視官に訴えて、同時的直観的に理解せらるゝ直線的の形を有する漢字と、全く音より成り立ち時間的に受動的に刺激せらるゝ曲線よりなる仮名よりの印象を調和するの困難なる、自然思想の速力を減じ、融合の度を減じ、到底痛切なる抒情詩的詩歌の製作せらるべくもあらざるに至れり。この間にありて和歌が一般国民に偉大なる魔力を有せりしも吾人が大和言葉によりてのみ感情をのべたるを以てなり。

八、快不快および適意不適意

皮膚に於ける直接なる普通感覚は快、不快の感情を起こせども、視覚聴覚よりは興奮、沈静、緊張、弛緩の類目に入るべき客観的感情を起こす。快不快の実感的感情を強むるときは単に意志力のみを感じ、その感情の方向を意識せざるに至る。されどもこゝに再びその内容を要求せむとし、快、不快の実感を得むとす。これ客観的感情は快、不快の直接な

る感情を内容として発達せるものなるを以てなり。この普通感情と客観的感情とは互いに相交渉するものなるを知らざるべからず。詩歌に於いて客観的内容を与うるものは観念にして主観的情趣をあらわすものは音調なり。観念は意識の全内容を分肢することによって客観化せられ、情調は雑多なる感覚観念を統一することによりて現わる。故に音調は詩歌に力を与え、材料は変化を与う。和歌は音調を重んじ、句切れを嫌い、俳句は観念の配合を生命とし、切字を約束とす。俳句は解剖的にして和歌は綜合的なり。吾人が将来の詩歌が必ず和歌俳句を根柢とするものたらざるべからざるを信ずる所以は、この二傾向を同一なる詩歌に兼備せしめざれば十分なる効果を収むる能わざればなり。詩歌は感情を重んぜざるべからざれども、同時にその感情に客観的内容を与えざるべからず。すなわち理智と感情との調和は詩歌の生命なり。

九、詩歌の「山」と情調

簡単なる感覚および感情は統一的意識の客観的、主観的要素なり。而してある感情要素他の要素を圧するとき意識は統一せらるゝなり。故に詩歌に於いては何らか主なる情緒が他を従属せしむるの位置にあらざるべからず。各観念感情が同一なる勢力を有し、横列的に排列せられ、繁多なる観念の推積をなすが如きは、実在の情趣を表現せるものに非ずして、偽れる或いは他の外形を模倣したる作物たるべきの証なり。この情調を客観化したるものを「山」と名づくるなり。

十、観念と感情との不和

観念と感情とは相ともなうべきものなれども、その間に不和を来すことあり。そが消極的に、観念に対する感情が統覚連想作用の感情のために圧せらるゝことあり。これ俳句において見るところなり。積極的に観念に対する感情勢力を得、観念を圧するに至るは和歌に於いて見るところなり。これ二様の意識統一にともなう現象なり。俳句の調和の感じを主として和歌の節奏の感じを主とする所以こゝに存す。故に俳句は観念の配合を以て情趣の種類、方向を示し、和歌は音調を以て情趣の推移、動揺を示す。

十一、俳句の詩形

俳句の詩形は十七綴より成るを以て、実世間的意志生活を歌うべきほどの長さなし。故に常に実世間を超絶したる純審美的感情を表現す。すなわち外物と自己との関係より起こるに非ず。外物と外物との関係より起こる感情なり。故に実世間と直接交渉せる感情を詠ずる如きはいわゆる月並なり。この内容を没却し形式を過重する故に如何なる材料をもこれを詠じて美感を損ぜざるなり。

紅梅の落花燃ゆらむ馬の糞
大徳の糞ひりおはす枯野哉

の如きあり。

十二、嗅覚

詩歌に於いて俳句の如き特別の形式を有するものに於いても客観化するに困難なる、直接刺戟なければ再生する能わざる味覚、嗅覚の叙述の如きは避けざるべからず。況んや味

覚、嗅覚の感覚が一首の主なる位置を占むるが如きは詩歌として全く無価値なり。古今集春上にある

折りつれば袖こそにほへ梅の花ありとやこゝにうぐひすの鳴く

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれしやとの梅そも

宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

梅の花立よるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

の如き、梅の香が全く各首の中心となり居るなり。その無価値なること云うも愚かなり。

十三、和歌の特色

俳句が一般の詩と異るごとく和歌もまた一般芸術に比して異れる点あるを知らざるべからず。和歌は聴く人を予想すること多し。すなわち応答的の性質を有し、実世間と密接の関係を有するを以て、純粋なる芸術品と異る場合あり。「玉手さしまき」というが如き触覚に関する印象観念感情も、容易に全体の情趣に統一せられ審美的効果を失わざること多し。かつ抒情詩としての和歌が全体の情趣を定むべき音調は内触覚および聴覚を感覚的要素とせる節奏の感情に依立するものなるを以て、和歌製作の動機の裏には節奏的なる肉体運動あるを以て肉体的感覚を和歌に詠ずるは自然なり。されど触覚的感覚感情が一首の中心となる如きは不可なり。必ず実感を解脱せしむべきほどの強き統一的情趣なからざるべからず。

十四、初等審美感情

初等審美感情は、これを内包的および外延的の二に分類す。

内包的初等審美感情は調和の感情にして更にこれを音の調和および色の調和の二に分つ。

外延的初等審美感情は(1)空間的性質を有し、主として視覚に依立する形体感情および(2)時間的性質を有し、主として聴覚に依立する節奏感情とおよび(3)この両者はまた触覚に依立するを以てその結果として比例の感情を生ず。

詩歌に於ては調和なる同時的感情は、直接に表現し能わざるを普通とすれども、俳句の短詩形に於てはこの調和の感情に類する観念の瞬間的融合による美感を表現し得。されど和歌においては観念の結合、俳句に於ける如く緊密ならず、また形式も長く、直接この調和の感情を表現し得ず。むしろ時間的なる節奏の感情を主として現わし、調和の感情はこれをその余韻に托せむとするなり。また形体感情および比例感情は間接に審美的効果に貢献す。俳句にて「やかな止」を忌み、和歌に於いて頭重脚軽を忌む如きこの形体比例の感情の要求なり。

十五、調和と節奏

故にいま調和節奏の二感情につきて詳述せむとす。和歌に於いては実世間的意志生活を節奏的に表現し、その最後究極の解脱調和の境を余韻の間に彷彿せしめむとす。俳句に於いては直接に調和の感情を起こさしめむとする故に、すでに大調和の解脱境に出入しつゝあるを予想せざるべからず。故に「季」「切字」などの約束を根柢となせり。故に俳句は作者に非ざれば十分味わう能わず。何となれば俳句の生命は客観的の言辞の上よりも、作

者が製作の工夫の上に存するを以てなり。古今その作者の多数なる、俳句に及ぶものなきまた同一の理由に基くものなり。故に俳句製作は宗教的実験に類する傾向を生じ、団体を作りその中心たるべき人格を崇拝する風を生ず。和歌に於いても後世その風を生じ、滑稽なる伝授などの行われたるなり。

俳句に於いては各観念の強度を感ずれども、そが時間的節奏をば感ぜず。節奏は高低強弱二要素の規則的反復を要す。故に「五七五綴」の三句よりなる俳句に於いては到底節奏の感じを現わすべからず。和歌に於いて五七五七の二群をくりかえす時、次の五七は前と同じ程度の緊張を与えず。節奏は全体の経過を完了したる上に於いてはじめて一定の効果を有するものなる故、その連続の長短により各要素の高低強弱の差を増減せざるべからず。故に五七五七七の形式は一定の節奏を表現するに適当なるものにして五七五七と連続し来り、更に七をくりかえすを以て高潮に達して終結するを以てなり。されど五七五七七の形式は変化ある多様の節奏を現わさむには余りに短小なり。かつ後世五、七五、七七の形式に変り行きては和歌は全く節奏の美を失えり。竹の里人の歌論に於いて常に調子を論じたる、実に和歌の根本生命は調子に存するを以てなり。

十六、詩歌と哲学宗教

論理的感情は吾人思考の客観的目的物およびその相互間の関係より生ずるものなり。道徳的感情は吾人の思考および行動に対する主観的意識より発生する自我感情なり。宗教的感情は自我感情と天然との関係より発するものにして、みな能動的智的感情なり。かくの

如き能動的感情の統一融合せられ、そが初等審美感情と結合するとき、審美的感情起こり来るなり。故に審美的感情も、実世間的感情と根本の性質を異にするものに非ずして、むしろ吾人の情的生活を統一するところのものにして、これを保持せしむるに初等審美感情を以てするなり。故にその感情の進行には感官的感情および情緒をもその要素とし、或いは味わう者に与うる結果的印象としてこれを包括す。故に完全なる芸術は論理的感情、道徳的感情および宗教的感情を興奮せしむ。主として簡単なる形体の感情を起こすべき均斉および比例的分肢などの形式より成立し、論理的、倫理的および宗教的感情と独立しやすき建築に於いてすらもその大さの関係を認識する時は論理的感情を満足せしめ、またその形式が吾人認識の極限に達する如き大規模なる時は宗教的感情を起こさしむ。造形美術はことゞく外界現象と結合するが故に連合関係主要の地位を占むるに至るべし。されども詩歌に於いては統覚的観念結合にともなう、すなわち思想進行の難易、成否に依立する智的感情を最も直接に現わし得べし。音楽はこれを主として情緒の動揺および解脱として現わす。故に詩歌と音楽とは互いに相助くるものなり。

十七、審美的感情

この智的感情と初等審美的感情と官覚的感情々緒とが相融合し統一したる効果に合一せらるゝことにより高級の審美的感情起こる。故に詩歌に於いては初等審美感情が智的感情の保持者となり、また統一者となるなり。詩的感情はすべての内容が必ず同一効果に向かって融合せざるべからず。各現象を万有全体と相関連せしめざるべからず。外見の繁雑を

徹して事物の本体真相を直観せざるべからず。自己の意志をひとたびは断絶に導き、再びこれを宇宙に拡充せざるべからず。自己を宇宙に同化せしめ再び覚めて自己心中に宇宙を見出さゞるべからず。

十八、詩歌の本性

詩は天然現象および人間情的生活について云いたるものに非ず。詩は就いて云わるべきものなり。何となれば詩歌創作は吾人の心的活動の全体を直接に発表したる一種の衝動作用なればなり。詩そのものは無自覚の所産たらざるべからざればなり。すなわち詩は天然の模写に非ずして天然そのものなり。

吾人の思想は全体として一つとして統一せられたるものとして実在す。故にその実在の心的活動を表現したる言語の形式および内容の上にも統一なからざるべからず。而してその統一は作者の精神力と技巧とによりて数種の程度に現わさるべしと雖も、ある一定の優勢なる情趣により統一せられたる緊密なる、しかも簡明にして真実なる内容と形式とを有する詩歌にしてはじめて紛乱を極めたる実地意志生活に対し解脱の歓びと生命の力とを与うるを得べし。

十九、詩歌批判の標準

故に詩歌批評の標準は、そが真実なる心的活動の表現なりや否やと、その表現せられたる内容と形式とが吾人を実世間の紛乱より解脱せしむる力ありや否やにあり。故に統一し融合し緊密なる形式内容と強烈なる感情の消長とに詩人の心を傾けつくせる熱誠を認めざ

るものは高級の詩歌と云うべからず。いわゆる低徊趣味者流の遊戯的消閑的文学の如き吾人の理想を去ること数千万里なり。

二十、詩的解脱の心的情態

詩歌は徒爾に製作せらるべきものに非ず。必ず大なる人格の感化と捨身追求の熱誠とを以てし、機縁相熟し、行満ち功成るの時、忽然花の開くが如く心中に輝き来る光明に驚嘆したる叫びすなわち詩歌なり。雑と助とを捨て、正に向かって専念希求し、能生の因たる吾人の意志と、所生の縁たる客観的対象と相融和し、理想と現実と、究竟と荘厳と相一致するの一瞬に詩歌は製作せらるゝなり。詩歌は日常平凡の現象に非ず。微妙にして稀有の現象なり。故に詩歌製作の瞬間に於いては吾人は万象を全体として、また一定の関係に於いて結合せられたるものとして活潑なる情趣のもとに認識したる時に製作したるものに非ざれば理想的詩歌とは云うべからず。

人間ひとたびこの人生の真相に触れなば宇宙万象は全く新たなるものとして伝来の拘束を脱し、吾人の眼前に活躍すべし。この機に触るゝや、驚嘆につぐに自己能力の自覚となり、勇猛なる心的活動無辺際に増長し、骨髄に徹入せざれば止まざらむとす。これ函蓋相称うが如き静止的調和に非ず、他と自己と分つべからざる水波の如く、悲しみに非ず、歓びに非ず、差別の見滅せむとするの一刹那、電光一閃し来る心意の転機なり。乱意に非ず、空閑に非ず、乱意を捨てゝ空閑に処せむとするの一刹那なり。即得必定時刻の極促なり。水火相交わるの間に於ける唯一の白道なり。貧窮、富貴、下智高才、罪根浄業の差別の見、

氷の如く消え去るの一瞬なり。漸に非ずして頓、堅渉に非ずして横超、浅近に非ずして深遠、雑に非ずして純、迂路に非ずして捷径なり。詩歌は人生至高の経験を経たる天才の所有なり。日常平凡の談話にはあらず。

――詩歌製作の衝動とその表現法を論ず・9・10・アカネ――

○

偉大な事業の半面には必ず痛切なる悲哀がある。実世間的事業にても、芸術的作品にても、その根柢に悲哀を蔵するものは必ず偉大なる力を有して居る。悲哀を感ずるは天才でなくては出来ぬ。自己の身に悲劇が迫って来ても、楽天的軽薄を脱することの出来ぬのは凡人である。子規の俳句和歌文章みな客観的の傾向をとって居って、少しも差別の小我見を加えなくて、それで読者の全精神を引きつける力のあるのは、痛切なる人生上の実験があるから、一時的な外部的の光彩は顧慮せずに一瞥たゞちに真実なる根柢を直観したからである。前後左右を顧みずに一心専念信仰のまゝに行動するの果断があったからである。子規の文学の偉大なるは、この一方に思い切り捨てたところがあるからでこれが一方非常の力を得た所以である。

ひとたび子規の一生を考える時は活きた教訓を得て、下らぬ人生的の不如意などを気にする必要はないように思って、余程の困難でも道のためならば堪えようとする勇気が出て

くる。古来宗祖が一身を犠牲にして得たる威力によって、末世の僧侶が安逸をむさぼって居るという宗教上、古今東西変らざる事実はまた文芸社会の上にも認めることが出来るようになるであろう。現在および未来の文芸は花鳥風月の風流のみを事とするものでなく、必ず人生の批評をなすべきものであるを思う時は、文芸界の偉人に対してその後継者の対度は十分の注意をもって観察する必要がある。殊に実利および世間的虚栄が教育なき旧時代の思想を有せる中年以上の人を堕落せしむる自然の傾向の、意想外に顕著たるべきを思う時は、これを改革し新生命を復活せしむる青年の責任の大なるを感ずるのである。日本文化発展の速度は随分急激であるから、七年という年月は決して短かい年月ではない。殊に二十七、八年戦役後より三十七、八年戦役の間の七年は国家全体として最も進歩の激しい時であった。今日の青年は自覚すべき時である。旧思想の老人らは極めて不必要となりまさりつゝある。子規も団十郎菊五郎をつかまえて演劇改革を説くことの愚を笑って居った。明治維新のことは全く青年の手によって成就せられた。俳句も漢詩もまた青年の手によって改革せられた、と云って、和歌も必ず青年の手によって改革せらるべきであると云って居る。今日和歌研究に従事する青年は必ず十分天職を自覚しなければならぬ。また何びとも青年の意気を失う時は歌壇の賊となる時であるということを考えねばならぬ。日本の新文明も自然科学の方面はともかく多少の進歩ありたりとせむも、ひとたび哲学宗教芸術等の方面を顧みる時は、全体として極めて憐むべき情態にある。殊に歌壇の如き、新智識なき老人と、文芸を骨董視する門外漢と、半知半解の西洋文学に酔える軽浮なる青年文

士と、余りに無邪気なる名誉心を追う一部の青年との集合のみにして、児戯に類することのみに日を送り居るのである。吾々は微力であるけれども、同志の人々と十分の用意と決心とを以て猛進するべき時に達したと思うのである。殊に子規の七周年に際し、時代思想の急激なる変遷を睹聞して一層この感を深くするものがある。

――子規忌・9・アカネ――

○

一、実世間的生活に対する芸術家の態度

リヒヤルド・ワグネルの伝を読んでいると、こんなことが書いてみたくなったから、読書を止めて筆をとった。

表面と裏面とは大抵ちがっている。花々しい文明社会の裏面には、極めて卑屈な隠謀的な仕打ちが潜んで居る。芸術家と称しつゝ虚栄心、功名心を底に潜めて居るものが多い。そして芸術家間にても一般の小商人の如く、すべての行動を売買的になし居るものが多い。妻子もあるようの人が都会生活を送る上からは、自然俗に媚びるに至るのは仕方がないようなものの、真の文芸を味わゝむとするには飽くまで主義信仰を守って俗衆の迫害を堪えつゝ実世間生活上の深刻な味わいを知らねばならぬ。けれどこれは奮斗に堪え得る人にのみ求むべきである。実世間生活の悲惨に泣きつゝも、却ってそのために反撥的勢力をふる

い起こして、胸に悲痛を堪えつゝ芸術的快活を保ち、また製作の感興によって実世間的憂患を忘るゝほどの精神的弾力を有するものでなくては文芸に従事する資格はない。

正義を守り、節操を守り、国民に真に偉大なるものを告げ、新らしいものを与えむとするものは必ず迫害されて居る。一般に浅薄な了解に容易な、深くも強くもなけれど表面立派の、しかも荘厳に達せざる並普通の、平凡のものを好むのは愚衆のつねで、今さら仕方がない。けれども文芸に従事し、多少は趣味も解しておりながら、単に虚栄心と利欲心のために自己の良心にさからって、正義のために奮斗するものに妨害をなす人間がある。正義のため、道のために尽す人間を迫害する人間の霊魂ほど哀れなものはない。永久に呪われてしまうからである。必ずその悪業は自己の霊魂のみならず子孫にも禍いを及ぼすは明らかである。

迫害せらるゝ人間はまた幸福の人間と云える。彼らは心に何のやましいところもない。平凡人に迫害されて居るのはその心が清いからである。心の清い者は迫害者を呪詛する力を有して居る。自己の心に深い同情心がある人間は、残忍な、利己的の、無情な人間を呪い得るのである。この破壊的の力がなければ圧迫された時に破滅してしまう。

清い心を持っておって、残酷な人間に迫害されて破滅する人間がある。清き、されど弱きものゝために折伏の剣をふるうのが義人である。

残忍なる人間とは、感覚の鈍き故に同情心弱き、見識なき故に大胆なる、虚栄心盛んなる故に隠謀的な人間である。

一方この残忍な人間を呪うと同時に、一時的のたかの知れた俗的虚栄心を去らなければ文芸は生れぬ。文学者の少し位いの豪遊などほど片腹痛いものはない。見じめの、哀れのものである。精神的享楽は評価すべからざる価値がある。けれども俗的享楽は価値が定まっており、また千篇一律、平凡陳腐である。たゞ文学者らには珍らしきゆえ、はじめの間は興味をひくであろう。ちょっと旅行、湯治などをして、それを書きて金に換え、また旅行するなど、旅行も随分殺風景になる。そんな事が得意で、主義より評判、真価より俗受け、正義より隠謀というように傾き、不安のさゝやかの栄華のような事をして暮す人の死にぎわの思い出は悪いことであろうと思う。死にぎわの思い出をよくするのは、無常の人生に永久の生命を与うる所以であるのに。

虚栄的生活と、白粉を塗った女の顔ほど淋しいものはない。虚栄心の強い人間を無邪気と見るのはいかぬ。犯罪者の多数は虚栄心が強いものである。況んや文芸にたづさわるものは、自然人間精神上の消息に通じての上の事ゆえ、犯罪者以上の悪事を根本的に働くものである。

実世間的生活に対して文芸家のとるべき態度は、自己の修養上からの心掛けもさることゞら、一方俗衆および同じく文芸にたづさわるものの中の悪人征伐を心掛けねばならぬ。

また積極的に妨害し、迫害しなくとも、文芸を解せざる、而かも謙遜を知らざる俗人の文芸に対する軽視、または真摯の気風を欠き、文芸に対し単に遊戯的態度をとり、敬虔の信仰的熱誠を欠くもの、また消極的迫害者であって、矢張り道のために戦うものを苦しむ

る点に於いては一つである。かくの如きもまた呪わるべき人間であって、末には碌なことはない。

二、富財に対する文芸家の態度

富財は金銭によって代表せらるゝ。富財は人間の生活を維持する方法である。故に金銭は人間意志力の表象として意義を有するものである。故に金銭の効果は単にその数量によってのみ限定し得るものではない。故に金銭は人間の意志力と相俟ってはじめて元来の意義を認むることができる。金銭ということを過重せずに、生活または富財ということを考えねばならぬ。金銭は単に数量によって評価せらるゝけれども、生活とか富財とかいう考えは一層哲学的の意義を帯びてくる。生活または富財という考えなく単に金銭の数量によってのみ限定（ベスチンメン）さるゝ人間の行動は、従属的動機より発するものである。故にその行動は他の行動の方便となるもので、それ自身に目的を有して居らない行動である。それ自身に目的を有して居る行動は、それだけにて完成しておる行動であって、文学者のいわゆる無目的の行動である。他の行動を要求するために与うる金銭と、他の行動のために使用せむがために受くる金銭とに関する行動は、意志解脱の行動ではなくて、新たなる意志を誘致するものであって、昏迷的行動である。

実業家すらも真に富財を知悉するものは、単に金銭の数量のみを過重しない。今の文学者が、人生とか生活とか生活難とかいうのを単に収入位いの簡単のことに考えて居るのはその作の小説を見ても、また平生の実世間的生活を見ても分る。もっと甚しくなると、月

々の少しばかりの収入の増加を大家になりし事と混同して居る者もある。

今の小説、脚本の一切は必ず元来の生活という意味でなくて単に金銭の数量的獲得を考えに入れて居ないものはない。今の小説家の多くは人生または生活に触れているのではなくて、生活の方便に触れているのである。それ故その表現する生活難というのも浅薄なものになって、少額の金を恵まるればすぐ反対の得意になるようの浅薄のものばかりである。要するに信仰がなくては何があっても役に立たぬのである。

三、性欲に対する文芸家の態度

肉欲は何びとも経験し得らるゝけれども、恋愛は一生知り得ずに死ぬ人間が多い。恋愛と云っても実は根柢に肉欲があるので、肉欲の表面を飾って云うのであると云って、真を穿ったように思って居る者がある。されど肉欲が優勢（ヘルシェンド）の情態にあっては恋愛は起こらぬ。しかし、恋愛が肉欲に堕落し、肉欲が恋愛に向上することはある。このプロセスを現わしたらば面白いと思う。恋愛はたゞに肉体、または肉体の一部の衝動のみを以て成立するものではない。必ず深刻なる、強烈なる精神作用をともなうものである。故に肉欲は恋愛に比すれば進化せざるものであり、また部分的のものである。それ故、肉欲はそれのみを以てしては文芸上何らの意義もない。肉欲は文芸製作物の優勢なる内容となすことは出来ぬ。全く従属的価値を有するのみである。肉欲が全篇の骨子となって、平凡緩漫なる行動を起こす如きは決して高尚なる文芸の内容たるべきものではない。

――生活問題・9・アカネ――

○

真詩人は常に因果律を超越せる絶対の本体を観じ、全体を直観す。故に人と相対するその人の個々の言行容貌よりも直ちにその人の全精神の本体そのまゝを全体として一刹那に直観す。故に真詩人は、凡人を過重し、自己の天禀と経験との威力によりてこれを霊化し、自己と同一の地に導かむとす。真の詩人の周囲は天才に買い被られたる凡才を以て満たさるゝなり。然れども、凡才は畢竟凡才なり。はじめより凡才として俗人とともに奔走し居れば殊勝なれども、他力にて自己の資性を発揮したるものゝ、さて自らの能力を統御する能わざる憐むべき人間は天才の死後、遺弟の間に発見せらるゝなり。

真詩人は人を過重視するのみならず、また天然しかも平凡の天然のうちにも異常の意義を認め、法外の興味を感ずるものなり。天才は直ちに現象の本体を直観するが故なり。正岡子規氏の如き明治に於ける唯一の真詩人たるべし。

一つの花に対して直ちにその情趣を認め（従来の用語に従えば趣味を発見し）その花の本体、本性を発揮するは詩人にして、これを分類し、全く抽象的観念の下に何科の花なりなどいうに止まるものは科学者なり。人間を見て直ちに貧富、地位などを以て分類し、華族、平民、主人、下女などの抽象的観念によって人を認むるものは俗人なり。詩人は必ず彼らが何の人種に属するか、その他社会上の地位などによりて判断せずして、直ちにその

人格の全体を一瞥直観せざるべからず。故に詩人は、科学者および俗人の如き冷淡を以て世を渡るべからず。詩人は必ず熱烈なる情緒を有せざるべからず。世にありて甲斐なきものはいわゆる冷静の詩人なり。

極めて小規模の事業にても必ず嫉妬、中傷などの障害あり。自己に能力なきものは他人の各方面の発展を嫉むものなり。しかれども各人に能不能あり、一人にて万人の万能に優る能わず。自らの長所を発揮すると同時に、他人の長所を尊敬し、助長し、相補けてゆくべきなり。自己の配下に自己以下の劣等の人間のみを集合して宗匠風に構えてひとりよがりを極めて居ろうなどいうは徳川時代の遺風中最も賤しむべきもの、歌俳の社会にかくの如き傾向の見ゆるもまた徳川時代の哀むべき遺風なり。彼らは配下に愚劣なる門弟を集合し、一方社会上地位の優等者に向って引立てを懇請する、その陋態見るに堪えず。

悲劇は利己的なる、残忍なる人間にして、しかも多少の神神力を有する人間が更に他を顧慮せずして全く自己の満足のために行動する時、その周囲にこの悪人を征服すべき人間なき時に起こるものなり。その悪人の第一の特徴は多少の精神力を有することなり。そのために周囲の無邪気なる或いは小名誉、小利己心さかんなる人々はその悪人のために利用せられて、人を誤解し、恰も傀儡のごとく悲劇の終結に波打ちつゝ漂いゆくなり。しかもその悪人もまた自ら悲劇の中心たるを自覚せざる時、その悲劇は最も悲惨なるべし。策略、誤解、無自覚などは悲劇構成の心理的要素なり。何びとも自己の周囲に或いは家庭、親族、交友間にかくの如き悲劇の進行しつゝあるを認むるなるべし。これ全く実世間生活の真相

にして、古来の偉人、天才が必ずこの無常観より出立したる所以なり。この悲劇を断絶し、因果輪廻の繋縛より解脱せむとする努力、意志、熱誠は、実に真の詩の本性なり。悲劇の中心は無感覚なる、同情なき、残酷なる人間なり。彼らは同情せざるに非ず、同情する能わざるほど敏感を欠き居るなり。故に彼らは野獣に近し。この野獣征服のために敏感を有し、高邁の意気を有する天才の捨身奮斗するとき、こゝに詩は生るゝものなり。無気力のものは決して詩人たるべからず。終身奮斗の勇気あるものにしてはじめて中心に勝利の喜悦を禁ずる能わざる詩を得べし。

空想趣味は微妙の趣味なり。しかれども力なき不確実の趣味にて、不明瞭と神秘、無気力と優美などとを混同し易し。しかも表面に低徊して裏面に透徹せざるものなり。故に堕落しやすく、極めて危険の趣味なり。実験的といい、空想的という、みな力の強さに依るものなり。分類に非ずして程度の差のみ。吾々が鉄幹氏一派の趣味を排して子規一派の趣味を継がむとするは全く一つの空想的にして、一つの実験的なるを以てなり。

小児の虫などをいぢめて愉快がる残忍性は大人にも認め得べし。他を苦しめてたゞその苦痛の表情、動作を客観的に観察して愉快を覚ゆるなり。他の内心の苦痛には同情せず単にその苦しむさまを見て楽しむものなり。小児は苦痛を堪うるを知らず、苦痛を覚ゆるとき泣き、或は拗戻を以てその苦痛よりのがるゝなり。苦痛を知らざるものは残忍なり。故に自己享楽のために悪事を遂行す。畢竟かくの如きは人間として極めて幼稚なるものなり。然れども彼らは無神経なるゆえ健康にして思慮なきゆえ猪の如き勇気を有す。恰も盲目の

肥大漢が闇中に暴れまわるが如し。彼らを防ぐ唯一の手段は遠く離れて相手にせざるにあり。かくの如き種類の人間は、何びとの周囲にもひとり位いあるべし。彼らに近づけば悲劇となり、遠くから見て居れば喜劇となる。彼らが家庭または近親のものたらざる以上これを遠ざくるを最上の策とす。

現代の如く精神の閑却せられて物質の重んぜらるゝ時代は稀有なり。現代の悪風潮を増進せしむる時は日本国民元来の特色は全く失わるゝに至るべし。日本国民が元来の美点を失い、堕落したるを平安朝時代および徳川時代の淫靡無気力の気風養成せられむとする如し。日本国民は平和に栄ゆる国民に非ず。祭礼と戦斗とは国民の遊戯なり。一つは喜劇にして一つは悲劇なり。悲劇は壮厳にして、そが印象は永久なり。喜劇は快活なれどもその印象は刹那的なり。吾人は国民が祭礼的、喜劇的になり、自覚せずして真実の悲劇に没落せざらむを祈るものなり。物に表裏あるは自然なればなり。夢が醒めて驚かぬ覚悟はありたきものなり。

日本国民の特色は家庭的なるにあり。国家をも一つの家庭となし、国民は皇室なる家長のもとに統一せられたりしなり。この国家に対する国民の感情を最もよく歌いたるものは実にわが国千古の歌聖人麿なり。天平時代の歌に至りては支那風俗の悪感化にや、非家族的の花柳社会趣味を歌うに至れり。家族的興味なき微妙の人情を欠ける趣味は直ちに人間を禽獣に近からしめむとす。現代の悪風潮もまた悉くこの非家族的、非礼儀的、花柳社会趣味の優秀なる微妙の情趣の消耗せられたる露骨にして無気力なる趣味は、社会の各方面

に害毒を流すべく、殊に文芸に対しては最も恐怖すべき微菌なり。

自然派という青年文士にして、また下らぬことの通△を得意がるものあり。すべての事に通暁するは可なり。しかれども肝心の本を忘れてせゝこましき枝葉の下らぬ智識を誇示するなど再び徳川時代の戯作者に堕落せむとにや。人情に通じ、世間になれ、あくがぬけ、執着がなくなるを得意とするもまた徳川時代の百姓町人として犬の如く生活すべく、自ら勢力と意気とを殺さむ方便としてはよからむ。しかれども明治の青年はどこまでも田舎気質の灰汁強い執着の強い趣味を固持せざるべからず。散る花のように、あゝ美しいと人に賞めらるゝようの見世物にならぬ覚悟必要なり。徳川時代の武士道という如き、またこの花柳社会趣味の一変形にすぎず。本質の問題に非ずして形式の問題なり。名聞のために妄動したるに過ぎず。現今の平凡なる西洋人に武士道などと称讃せられて得意になり居るは愚の極なり。泰平は人間をして名聞外見に執着せしむ。内心の命令によって行動してこそ個人の威厳は保たれ得べきなれ。

近ごろ虚子氏の風流儀法などをはじめとして地方の俳句雑誌などにいわゆる自然主義やら低徊趣味やら下らぬ花柳社会の記事を高慢気に掲載するもの多し。嘔吐の至りなり。登張竹風氏は自然主義を排し理想主義を唱道するようなれど、鏡花の如き空想趣味の、これに加うるに無気力淫靡の花柳社会趣味者と一緒に沈鐘の訳をするというような事を聞きては竹風氏もまた徳川時代の臭味のぬけぬ旧時代の人なるべし。鏡花などを理想派とかロマンチック派とか云い居るは死骸の分類をするようなものなり。生命とは若きものの所有で

あるということを気付かぬにや、気付きても理解できぬにや。

文芸に従事するものが社会の各方面を観察し描写するは不可ならざるのみならず必要なり。然れども市井の俗人に伍して得意なり。浅薄なる俗趣味を無上に有り難がる如きものを排せむとするなり。高遠の理想を有するに非ざれど卑近の風俗をも十分観察する能わず。要するに文芸は材料の問題にあらず。如何なる社会を描写するも可なり。たゞ平凡浅薄緩漫なる市井の俗趣味を有り難がる如き無邪気すぎたる卑劣の根性を排せむとするなり。

――偶感録・9・アカネ――

○練習の方法

必ずしも和歌に限らず俳句にても小説にても気乗りのするまで努力し、中途にて放棄せざることと、常に練習をつゞけ、いわゆる稽古を怠らぬようにして居るのが肝要である。はじめは少しも調べがないようの歌も、二日三日と苦心し、その表現しようとする情趣をよく〳〵思念して居るうちには機が熟して自然調子が活動してくるのである。かゝること は極めて平凡のことであるけれども、天然の景に対しても、人情に対しても、常にこれを観察し味わう上に注意すると同時に、これを表現する方法に注意せねばならぬ。すなわち美術家たる用意を欠かぬようにしなければならぬ。神来の興によって作歌するまでには人

為的技巧の練習が必要であることを忘れてはならぬ。この根柢がないのがいま日本の美術文芸界不振の原因である。絵画に於ける写生の如く、和歌に於いては常に言語の活用の上に苦心し、その意義と音韻的調子と語句の語勢の上に不断の注意をせねばならぬ。飽くまで日本語の精神を呑み込まねばならぬ。中古文典を規範とする学校用の文典などを見て、生きた言語を窮屈のものにするよりも、万葉集なり、古事記などを読み、一方現代活用の言語に注意して言葉の多様なる変化曲折を求めて、成るべく内心の微妙の感じに適当する表現法をとらねばならぬ。この表現の方法に修養がないゆえ、日本現代に長詩が生れぬのである。この修養の根本は必ず俳句和歌研究製作にその第一歩を進めねばならぬ。元来、日本の言語および国民性も本来は韻文的のもの、すなわち東洋一流の言語に深甚の意義を含蓄せしむる傾向があるので、韻文の分らぬものには日本の文学の真趣味は分らぬ。日本文学が常に韻文を中心とせることは日本文学史上の明らかな事実である。韻文を根柢として研究すべきであればこそ文芸雑誌少くも日本文学の研究製作を主となすものはみな俳句和歌を中心とし又は長詩を中心として居る。小説中心の雑誌の如きは畢竟娯楽の道具である。日本に於いて思想界の堕落したのが平安朝と徳川時代で、日本文学史上最も散文的の時代すなわち堕落の時代である。明星一派の歌のどことなし剛健を欠いて居るのは平安朝文学の影響があるので、日本派以外の俳句の下品なのは徳川時代の下層社会の趣味が伝わって居る故である。文芸の理想は必ず韻文に向わねばならぬ。それゆえ和歌を練習することは同時に日本文学研究の根柢を作るものである。従って平生の読書の種類もまた韻文的

のものを選び、成るべく純粋の言語を選ばねばならぬ。今まで説いた各項とも余り空漠な抽象的のことのみであるけれども、元来和歌作法などと茶の湯、活け花の方式を教うるようのものではない。また歌はかく詠むべしと事実的に明らかに規定すべきものではないゆえ、誤解を避くるためかく漠然たることを云ったのである。

――和歌入門・9・アカネ――

○

独歩氏の作品は簡明にして純粋なり。文体内容緊張し読みて心地よきこと他に比すべき作家なし。独歩集、濤声とゝもに数版を重ね、新刊の独歩集第二また市場に好況なるを見て現代青年の趣味に健実なるものあるを思えばまた吾人をして意を強うせしむるものあり。岩野泡鳴氏の詩には節奏あれども、どことなし混濁せる感あり。独歩氏の作は情熱に於いて泡鳴氏に及ばざるも、その調子の明快なるは喜ぶべし。独歩氏の作には、氏が人生上の強き一経験の常に諸種の形をとりて現われ居るを見るべし。氏が青年時代失恋の強き印象は一生涯氏の精神生活の上に偉大なる感化を及ぼしたる如し。理性は常に無節操をのべれども、内心の奥底に徹せる深き強き印象はこれを拭い去る能わざりしなり。その他、少年時代の経験および時代思潮に対する批評および薄命者に対する同情、天然に対する憧憬等の思想もまたこの強烈なる一経験の色調によって影響せられ居るを認め得べし。失える、

捨てられたる空しき感情を抱いて独り胸に追慕の悲しき、甘き情をたゝえつゝ内心の静けさを求めむがために、暴風の中にきほい入らむとする奮斗を、簡潔なる文体を以て直観的に描写す。人生に直接なること独歩氏の作品の如きは極めて稀なり。技巧および脚色の変化を辿りて興味を求めむとする読者は失望すべし。然れども散文の冗漫と繁雑を厭うものは独歩氏の作品に涯底なき興味を見出すべし。氏の作は、読みて眠りを誘うものに非ず。読者に醒覚と不安とを与うるものなり。飽くまでも不安動揺の情趣を以て満たさる。これ同氏が現代作家中の稀有の文豪たる所以にして、また同氏が天才の域に達せざりし所以なり。吾人は現代作家中独歩氏以上の気品ある作品を見ず。吾人の趣味よりみて最も進歩せるものなり。元来小説は嫌いなる記者の如きも、独歩氏の作は大抵一読せり。同氏の作は詩的なればなり。リヒヤルド・ワグネルその母に宛てたる書簡中「小生はこの不幸を喜び申し候。こは小生をして、小生はこの広き世に誰よりも何物をも期待すべからず全く小生自身にたよらざるべからざるを十分に覚らしめ候。かくして小生ははじめて不羈独立の感を得申し候」と。偉大なる精神を有するものは常に寂しき人たらざるべからず、詩はこの寂寥より生まるゝものなり。独歩氏の作には常に一種の情調あり。読者の感情を一洗する力あり。氏が「濤声」に序して「悲し、悲し、わがこゝろ悲し」と云えるはその製作の動機を説明せるものなり。

――新　刊・9・アカネ――

○

小生らは必ずしも文学を解せざる多数公衆のために消閑の具を供給せむとするものにはこれなく、小数にても真に文芸を解する同志と内心無価の悦楽をともに致し度く存じ居り候。一人二人にても心の全体を以て交わり候ことはこの世の無上の幸福と存じ候。また自己の信念を確立せむためには世間の悪傾向は何の容赦もなく正面より攻撃致すべく候。殊に神聖なる文芸を迫害するにさもしき利己心を以てする如きに対してはこれを折伏するの必要を感じ申候、現代社会の如く一般に意気消沈し、小人のはびこり居り候時には思い切り行動せねばならず候。自己のこゝろ以外に人間には恐るべきものこれなしと存じ候。俗権や名声などを恐れ居るようの意気地なきものは文壇より放逐すべき輩に候。現今国民一般に物質のみを重要視するの悪傾向のため精神的事業に身を委ぬるもの少くなり、批評家も作家もみな小売商人の如き態度をとり居るこそあわれに感じ申し候。要するに現代の日本は全くその信仰に動揺を来し申し候。思想界の混乱今日の如く甚しきはこれ無く候。新聞紙の如き悪徳を非難すると同時に挑発的の筆法を弄し居り候。小生らはかくの如き悪傾向を或る意味に於いて喜ぶものに候。現代の混乱は未来の光明の暗示に候。この時に小生らは如何なる困難をも堪え、主義を守り節操を重んずべきに候。現今社会の有名の人の如き、文芸界をはじめ各方面それほどの人物見当り申さず候。文士の生活および理想の如き、

その真相を見候ときには哀れとも何とも申し様これなく候。小生らは文芸が単に自然および人情を傍観すべきに非ず、必ずその内部に向かってこれを洞察すべきものなりと信じ候。一般思想界および現代思潮の表現たる文芸作品に向かって批評を加うるの必要こゝに生じ申し候。

……

俳句と和歌との差は度々説明致し候えども、なお俳句の修辞法を和歌に応用するも可なりやなどの質問これあり候、されど文学美術を通じて製作の動機はほゞ同一にてもその発表する方法により諸種の制限これあり、この製作の動機と表現の方法とを混同せざるよう願い上げ候。それは実地製作の上にて論じ候が捷径に候。

和歌にても小生らは実地感興なきことを技巧にて歌うよりも真実なる実情を尚び申し候。芸術的技巧もと　よりよろしく候えども、これには非常の手腕と主観的修養必要につき、実地真実の感じを歌うがよろしくと存じ候。遊戯的態度を以て製作し、徒言歌の多作は戒むべきことゝ存じ候。また古く作歌に従事候人々は歌はかゝるものと、過去の経験は未来の偏見となることこれ有り候。常に新方面に向かって精進候こと必要と存じ候。

――　消　息・9・アカネ　――

○

近刊のホトトギス第12巻第1号に夏目漱石氏の「文鳥」という写生文がある。数か月以前、大阪の新聞に出たものだと聞いては批評するには少し時期がおくれて居るようの感もするけれども、同誌附録巻頭の作であるから、元来かくの如き種類の文学にどれだけの価値があるか、すなわち読んでみて記者が感じたところを分解して見よう。書き方が直観的であるから楽に読めて努力を要せずに了解ができる。けれどもその感じは非常に弱いもので一体に力がない。美しいが弱いものである。全体に美しい**材料**、**気が利いた**言行とが生命である。文鳥と「鳥」になった故であろうけれども「猫」と比較すると「猫」の方が美しさが少くて全体に活動して居り、また沈痛である。

まづ、この美しいということに就いて述べねばならぬ。明星派の歌などを読むと、すぐ琥珀、瑠璃、紫、紅、星、夕日、黒髪、柔肌などという美しいようの材料が充満して居る。上野の絵画展覧会へ行ってもこの美しいものが沢山ある。更に下っては三越、白木屋などの陳列場から勧工場の末に至るまで、まづ美しいと云わねばならぬ。子供などが、まあ美しいと賞めるのを、決して美しくないと反対することは出来ぬ。

けれども、こういう美しいということは芸術でいう美とはちがっている。中村不折氏の「画道一斑」にもこの事が説いてある。こういう美しさは浅薄のもので、こんな美を味わうならば芸術による必要はない。材料の美しいことで興味をひくのは極めて幼稚であって、市井の不健全なる婦女の化粧や衣服などの装飾をこらしているのを見て美感を起こして居

るようなのは幼稚極まる趣味である。元来、高尚な芸術的の美感は、顔の造作や、衣服の色合いなどを部分々々に認めて居るような緩漫のものではない。むしろ部分々々に目が止まらずに全体の効果、全体の情趣に驚嘆するところに存するのである。

この部分々々の美を楽しんで居るのを肉感的（ジンリッヒ）というのである。小児の勧工場を美と感ずるのももちろん肉感的である。直接五感からの印象に支配せられて居るのである。この小児の如き肉感的態度は実に無邪気のもので美しい。けれどもこの肉感的態度を以て男女間の関係に対するときは肉欲的となって非常に醜のものになってしまう。つまり、この肉感的態度は幼稚の趣味である。この肉感的趣味は五感の対象となるべき外物に執着して居るので、色や形などのみを気にして居るのである。材料を重んずるのである。天井、床の間そのほか部分の装飾にのみ繊細な趣向をこらして全体とし何らの感じもない単に混雑の感じを起こさしめるような建築もまた市井の俗趣味の間によく見るところである。美という事を単に人工的に装飾したり、目を引くようの材料を堆積することのように思う、その原因はたゞ美しくするという計劃がいけないのである。芸術でいう美というものは、外部に現われた部分々々の色、形ではない。芸術では人間の心を単純化し、強く、深く心を一方向に導いて、これを恍惚たる情態に達せしめて、区々たる現世の憂患を忘れしむるほどの強い感化を与えねばならぬ。忘我、驚喜、歓喜、踴躍などいうのはこの境に名づけたものである。観者、読者をして生動せる情調に酔わしめて意識を断絶せしむるようの感を与えねばならぬ。婦人が呉服店にて衣服を選択し、小児が玩具を弄ぶようのとは

違って居る。あれこれと選択し、欲しがって居るような差別境に徘徊して居るのではない。必ず人心を唯一の方向に導いて、一心専念の境に向わしめねばならぬ。心が一つになった時は、美醜、善悪などの差別の見は消えてしまう。この時の心持の不可説、不可称の妙趣を芸術の美と名づくるのである。

人間が生きて居るのは各部分が統一し、結合して一人の人間になって居るからである。身体が各部分に散じてしまえば死である。心も真に生きて居るのは心が唯一の方向に向って居るときで、あれこれと迷ったり、執着したりして居るのは心が死んで居る時である。迷ったり、煩悶したりして居るのは却って活動して居るようにも思われる。けれどもこの活動は実に小さい活動で、これを一心専念の活動にくらべると殆んど活動とは云えない。それだから人が恋をする時には最もよく自己生存の感を得る時である。心が二つにも三つにも分れて部分々々に興味を持って、一利一害、一長一短と計算して居るようなのは恋ではない。恋が文学の中心であるのもこの理由に外ならぬのである。

元来、写生文というものは、この部分々々の興味を主としたもので、「山」と云って事件や景色の主要な点を強く描いて、全体を統一しようとして居るのである。材料的に部分々々をのべつに記述しては更に統一がないので、こゝに「山」ということを考えるようになったので、この「山」の情調によって全体を化して一つの融合し、統一したものとしようとするのである。

この「山」というものは、むしろ主観的感想に基くものである。事件のうちでこゝが面

白いと感じた、その主観的な感じが「山」の要素になるのである。これを見ても文学の中心というものはこの主観的感想であるということがわかる。

さて、写生文の起こりを考うるに、徳川時代以来の形骸ばかりの固定した形式的の理想すなわち固定した人為的、外在的、因襲的の主観的偏見に囚われた月並流俳句、勧善懲悪小説に対する破壊者、改革者として起こり来った文芸界の新運動の結果の一現象であるから、外在的、因襲的の主観的偏見を排するの余り、無心の自然を過重したのである。また子規は病牀に居って狭き身辺の些細なものゝ裡に深い味を見出したのである。枕許の一つの草花を見ても、これを直観することによって大なる自然に対し、または深刻なる人生の活劇に対するほどの深い感じを得たのである。この子規の境遇と天才とを考えて、そしてその指導のもとに成り立ったのが写生文であると思えば、今日の時代に生きて居り、足が立って歩き居るものは同じ写生文を書くにも少し考えねばならぬ。

それゆえ今日写生文に従事して居る人々の文章はとかく生命がない。「山」がない、あっても全体を統一するほどの力がないか、または強いて造ったものになって居って、その結果は冷淡の、よそ〳〵しい、物を茶化すような、不真面目の、軽薄な趣味となるのである。自然であるべき写生文は、単に自然の現象を記述するのみで、その感じは甚だ不自然のものになり、内心に感じた趣味が薄くなって、材料や事件のみがごた〳〵して居るから極めて冗長のものになってしまった。

以上の理で、文学は真実なる内心の実験的興味を根本とせなければならぬ。主観的、客

観的といっても、また物（マテリー）と心（ゼーレ）といっても、これを一つとし、または二つであるとする、いづれも哲学的空想の議論であって、深く直接の実験によって考えてみれば、物とか心とか、または主観的、客観的というのはみな便宜上、仮定的に運び来った補充的観念（サプリメンタリー・コンセプト）に外ならぬので、明らかに区別して存在して居るものでもなく、専一に名付け得るものでもない。個々の経験を積んだ結果、種々の見地から名づけたものである。要するに一切は人間の経験に外ならぬのである。人間の経験を外にしては一切は無意義である。言辞や文字が色々あって、その名義によって人は迷わさるるので、実験的でない空論がつまらぬのもこの故である。一切の迷いはこの人間の真実なる実験に戻り来って始めて迷執から解脱するのである。人間の経験は一つである、真実である、物も心もない、主観的も客観的もない。一つの真実なる経験である。この一つの経験に対して見方を異にするので、色々の名が生れてくるのである。そしてこの一つの経験に対して経験するところの人間すなわち主観を取りはなし、抽き去って考える間接な態度は自然科学者の態度である。主観とは関係がないとして存在して居るように物を見るのである。

それゆえ自然科学の研究は、細微に行きわたり、部分々々の研究になるので、虫一匹を一年も二年も研究するなどもこれから起こって来るのである。すなわち主観と無関係の現象を研究するのである。それゆえ間接の経験である。すなわち存在して居る個々の現象が相互作用して居る複雑なるものとして経験世界が見えるのである。直観的でなくて分解的

の見方である。内的経験でなくて、外的経験である。すなわち客観的態度である。

また一方経験者すなわち主観に関係せしめて、主観それ自身をも包含して主観が経験した全体のものとして世界を見る時は、世界は全く結合されたる全体のものとして現わるゝのである。自然科学の方の現象は人間が居らなくても起こるものとして取扱われて居るけれども、次の場合に於いては必ず人が居らなくてはならぬ。これを内的（インナー）経験と名づくるのである。すなわち直接（インミディエート）の経験である。すなわち主観的経験である、直観的態度である。自然科学は物質（サブスタンス）について研究するものであるけれども、この次の場合は現実（アクチュアリテー）を観察するのである。この次の場合はすなわち芸術家の態度である。

何となれば、この世の諸現象中には自然科学の方法により間接にのみ近づき得るものと同時に、一方には直接の経験にのみよって知り得るものがある。すなわち直接に外界の事物に関係なく内心に起こり来るものである。すなわち吾々の感情という如きは全くこの方面に属して居るのである。

こゝにまた考うべきは芸術の解脱の感じ、すなわち美感は忘我無差別の境に人を導くものゆえ、一見して無我の情態の如く考えられ、欲求愛恋の念を断ち、全く自我を没却し、悠々と天然を楽しんで居るものと誤解し、その忘我の境は主観的感想が漸次外物を統一しつゝついに主観的情調によって自然を統御し、融和するに至りし径路（プロセス）を度外視して、その結果の外形のみを全く静的に観察した結果の誤解であって、いわゆる野狐禅

と月並とはこのことを云うのである。主観的情調を強めて自然を統御する努力を避け、またはその勇気もなく、直ちに最後、解脱、忘我の境に遊ばむとするより、直ちに無我の自然、無意義の平凡なる事件に対し、最初より忘我的態度を以て対するゆえ、その描くところは冗漫の、意義なき、煩瑣なる記述、説明となり、殊に長篇に於いては少しも事件が発展せずたゞ雑然たる記載をなし、こゝにいわゆる低徊趣味なるものを生じ来るのである。すなわち芸術家として美術を作るに、あたかも自然科学者の態度を以てするゆえ、雑然たる部分の描写、材料の堆積となって、これを統一すべき主観的情調もなく、また自然科学者ほどの精確なる分解、分類もなく、ひとくちに云わばつまらぬ長談義となるのである。

それゆえ写生文家一般の態度は肉感的である。材料を重んずる。そして離れ〳〵の警句、浅薄の滑稽ぐらいが最上のものとなってしまう。卑猥のことを叙さなくとも写生文一派ことに漱石一派の作は一般にその趣味が淫靡である。淫靡というのは直接に肉感を挑発するもののみをいうのではない。全体を統一するの思想情調がなく、感情を一洗する強さも、力もない。繊細な技巧を弄して執着的態度を以てつまらぬ外形に価値をおいて、つまらぬことを興がり、常に女子の肉体の形体や色などの精密の叙述をしていわゆる低徊趣味を発揮して居るところは、世上の下等戯作者よりも健全であろうけれども、文芸の理想から云えば常に卑近の淫靡の趣味で、殊に詩作に従事し、深き、強き思想感情を短小なる言辞のあいだに表現せむとする歌人俳人らがこの一派の冗漫淫靡の風に化せられては、必ず月並句と明星流の歌とが生るゝのであろう。

芸術家が技巧を過重し、材料部分の外部の光彩を求むるようになるのは堕落文芸の徴候である。文芸の所縁は全く直観的、内的経験であって、人格をまってはじめて成立するものである。それを従来の写生文一派がその短所を捨つるを知らず、長所を発展せしむる修養を欠き、近時ことに三十七、八年戦役後西洋の物質的文明に驚嘆し、ひたすら物質を過重し、内心の満足を顧みず、外形の光輝を希求し、いわゆる成功主義、勢力主義、不人情悪辣主義の流行はなはだしく、内心この悪風潮に化せられ、精神を閑却して肉感的満足を求め、進んでは努力を厭い、一攫千金を夢みて、空想に耽溺せる暗愚を極めたる一般公衆の喝采を得たるを幸いとし、文芸によって衣食の資を得、進んではいわゆる実業家を模倣し、金銭の収入と虚名の喧伝とを以て市井婦女がなすが如き外見、外聞に浅薄なる満足を見出さむとする悪風潮を生じ、同胞が血を流したる結果によって得たる戦勝を祝するに軽浮を極めたる俗謡と、種々の滑稽文学の流行とを以てしたる国民は、有史以来未曾有の大海戦を目撃しつゝも一人の詩人のこれを歌うものなく、小説に、劇に、詩に、ひとりの悲劇の壮美を歌ったものもなかった。そしてこの軽浮なる国民の風潮に歓迎せらるゝには近時の写生文一派の作なるものは実に適当のものであった。

更に文学として言語の能力より考うるも、客観的現象の横列的記載をするに適するものではない。云うまでもなく言語は音を以て成り立つもの、観念の配列と同時に、音調節奏を重んぜねばならぬ。人の動作を写し、事件の発展を叙し、思想の形式を発表するに適するものである。然るに写生文は音調と節奏とを無視したもので、更に深き哲学的思想の如

きはその片影をも認めないのである。この散文的にして節奏の美なく、材料、部分の美を重んじて技巧に傾き、深き感情なくして浅薄なる外的の利害を過重し、全く無信仰の態度に流れ、さらに淫靡なる空想趣味に堕落したのである。これは最近の写生文派の傾向についての論で写生文全体の論ではない。この空想文学なるものについて一言しようと思う。空想とは区々の感情に執着して居るので、この小さい執着ということが空想趣味の特徴である。一切の実在は統一せられたるものとして存在して居る。互いに相関連して居るものを、取離して考えるのが空想である。努力せなければ金も得られぬのを、単に金を得るという一方のみを考え、その原因も結果も考えない如きである。空想趣味というのは、哲学的思想の欠けて居ることである。都合のよいことばかりを考えて居って、物の光明の方面のみを希求して、すべて物に表裏のあることを知らず、何時も〳〵美しいようの女を叙述して、それでこれが美であると思って居るようなのは、毎日朝寝をしながら一攫千金を夢みて居るのと同じで、こうなると空想趣味が夢想趣味になる。この空想というものは無経験で虚栄心の強い女子が溺るゝ趣味である。美しいよりも真実を重んぜねばならぬ。この空想趣味は前後の関係を無視し、生命なき部分、一過程なる一面の現象に囚われ居るので、この趣味を最もよく現わしたるはいわゆる花柳趣味で、売女の紛飾、虚飾を喜ぶ人間は必ずこの空想趣味を喜ぶのである。社会百般の現象は、その外形に於いて千差萬別であるけれども、内心の動機に至っては単一のものである。それゆえ近来の堕落せる写生文一派は、高慢気に、しかも観察は浅薄を極めたる花柳社会の記事を公表して浅薄なる「通」を気取

って居る。

この空想趣味も単にあどけない程度に止まっては居らぬ。空想的に労せずして利益と名誉とを得ようとする時は、すなわち空想を満足せしめむとする時は、こゝで人の悪い態度に出でるものである。都会といわず、田舎といわず、財産を失うものは多くこの空想趣味者で、堕落して人の迷惑を顧みず、賭博にふける輩の如きも、この空想趣味者である。この空想趣味は一時さもしい、はかない栄華のような真似をして、直ちに秋風とゝもに凋落するものである。その態度は真摯を欠き、堅実を欠き、甚しきは誠実を欠くに至るのである。

この空想趣味者は、区々たる感情に耽ってこの感情を唯一の方向に統御する意志力、すなわち強い感激、強い精神を欠いて居って、自己の感情を統御せずに個々の感情に駆使せられ、前后の思慮を欠き、他人の人格を尊重せず、自己の人格をも自重せず、全き人格としての全幅の感情を傾注すべき恋愛を思わずして、一時の出来心に駆られ、精神的活動を閑却し、肉体一部分の衝動に駆られて盲動する肉欲的残忍性を帯ぶるに至る。堕落の第一歩は実に現代に瀰漫せる不健全なる空想趣味である。

彼の明星派の短歌およびさきにホトトギスに掲載せられたる俳体詩と称するものの如き、またこの空想趣味の一派である。

故に吾々は写生文なるものが元来欠点を有せるものなるのみならず、ある意味に於ける流行を来したる時は堕落すべきものであって、元来高尚なる文学でなきも、無害のものが

更に現代の悪思潮を助長し、一般思想を軽浮たらしめ、沈痛深刻の趣味を嫌って、遊惰にして、悪意的にして、更に肉欲的なるいわゆる泰平にともなう国民趣味性の堕落に対し、これを増長すべき悪感化を与え、俳句ことに近時ようやく勃興し来らむとする歌壇の新運動をして十分の効果を得せしめむとする時は、吾々は写生文一派の作品の文芸の価値の甚だ低きものであって、その悪感化を蒙らぬようにせねばならぬのを自然に感ずるのである。畢竟するに、写生文一派の作品は時代に後れて居る泰平のうたゝ寝趣味である。

――写生文派作品の価値および文壇近況・11・アカネ――

○創作の意義と実世間生活

創作という考えはやゝもすると悪い結果をもたらすものである。経験もないことを空想して、統一のない部分々々を任意に接ぎ合わせて冗漫繁雑なる作品を作るようになる。けれども創作というのは、真実なる経験または経験を重ねたる結果、その経験が心中に統一融合せられて生ずる一定の情調を感ずるとき、この情調を如何に表現すべきかと、こゝに形を求め、色を求め、音調を求むるとき、はじめて作者自身も想像しなかったようの色形音調などを得るので、これは芸術作家の実験するところである。創作という感じはこゝにはじめて起こって来るのである。芸術家は造物者であるというようの感じが起こって来る

のである。芸術にこゝに造せねば理想的でない。

創作に対して模倣ということを考えねばならぬ。空想はいかぬ。空想を排して自然の実地を模倣するようになる。広義の自然派の運動である。けれども自然は確実なる事実としてこれを相関連せる全体として唯一の情調のものに認識するに至らなければならぬ。自然に対して部分的にこれを模倣することを止めて、主観的情調により統一せられたる自然を表現しなければならぬ。こゝで模倣から創作に進むのである。この模倣と創作とは両者が平行しつゝ進むものである。一つは技巧を、一つは理想を進めるのである。現代の詩界および美術界に於いて主たる欠点は、忠実に模倣することをせず、技術を練習せず、直ちに空漠なる理想を表現しようとして居るのである。西洋文学を研究せる人々および日本画家、西洋画家みな一様にそうである。いわゆる新体詩人が俳句も歌も研究せず、画家が手一本満足に画けぬのに、直ちに大規模のものを作ろうとする如きである。

また一方、技巧を練るにのみ偏して思想の方面を閑却するのもいかぬ。哲学、宗教などを研究せざる画家、小説家らが深さのない、部分的の作品のみを出すのはこの主観的方面の研究が足らぬ故である。

この二方面の一方を欠くときは、いわゆる部分的、肉感的の冗漫にして弛緩せる作品となるのである。この二方面の研究を平行させてゆくことは最も必要のことゝ思う。有名なる和田三造氏の「南風」の人間の脚がふら〳〵して居ったり、中村不折氏の「白頭翁」が活躍せる情調を欠いておる如きも、みな一方面の欠点ゆえと思う。自分の知らぬ画を批評

するのはいかぬけれども便宜上云うのである。朦朧新体詩は技巧に於いて、低徊趣味小説は理想に於いて、著しく欠けて居る故である。さて現在および将来に於いてこの二方面のいづれが発達し、いづれが発達せぬかというに、技巧の方面は漸次発達しても、主観的方面の研究は当分発達せぬと思う。こゝに於て吾々の主として従事すべき方向が暗示さるゝのである。特に和歌および生命ある新時代の俳句の研究、製作を中心として進もうとする吾々は、技巧と同時に決して思想主義信仰などを閑却してはならぬ。こうなると自然に実世間生活と密接な文学になるのである。技巧を過重し、風月を弄する閑文学よりも、実世間生活の直接の告白を主とせねばならぬ。華美よりも真実、誇示よりも実利、感情よりも意志を重んずるようにならねばならぬ。この意味に於いて吾々の文学は近世的になるのである。

国民文学

元来漱石氏の作物は、技巧を主として華美であること以外、文学の主たる内容たるべき恋愛は書かれなかった。女の顔面、手足、衣服などの美しい形容はあり、また男女の関係も書いてあるけれども、強い恋愛は決して書いてない。恋愛とは抽象的に云えば信仰であって、人心必然の要求である。この恋愛的熱誠のない文学は、或いは冗長平凡なる低徊趣味、淫靡なる花柳趣味、繁雑虚飾の衒学趣味などに堕落すべき、弛緩的性質を有して居る。独歩氏の作の如きはこの意味に於いて少しも淫靡の点のない、強い深い、そうして読者の

感情を一洗するほどの熱烈と真実を有して居った。漱石氏の作の如きが到底及ばざるものであると確信する。

子規の文学は決してあらゆる種類をつくして居らなかった。また熱烈と誠実はあっても、一種名状すべからざる如き動揺せる精微の妙趣に於いて欠けては居ったけれども、その形式は一分のタルミもなかった。この点が吾々の敬服して居るところで、近来の低徊趣味一派の作は到底子規の趣味と一致すべきではないと思う。

芸術の対象としての自然の意義

吾々は自己の態度をナチュラリストと云ってもよい。けれども今日「自然主義」という語が甚だ誤用せられて居るから困る。けれども「自然」ということに対して吾々の所見を発表する必要がある。元来芸術界の天才および改革者は必ずこの「自然」に親しんだものである。技巧にたより、理想創作という如き空虚の名義にかくれて居るようなものは吾々の甚だ嫌うところのものである。要するに人生上に深い実験を有しない人々の作品は価値がない。読書と空想とを基礎として製作をなし、批評をなす如きは有害無効である。人生および自然の無極（インフィニット）なるを感得せねばならぬ。こゝが芸術の奥秘、宗教の極致であると思う。痛切なる人生上の経験のない、浮薄なる表面的幸福なる人々は物質学識の如き徹底せざる偏見を以て無限の代りに有限を以てするのである。自然に親しんだ子規の文学が小規模で、時に崇高を欠く点があっても、なお深刻であるのは、二人が自然の無限――すなわち自然の不可思議に触れた故である。

こゝに於いて吾々は子規の文学が明治文学史中、一異彩を放って、他にぬきんでて居るのを悟るのである。子規の文学に生命があるのはこの点である。たゞ芸術家は一般人が見ざるところに生命を見るので、これをいわゆる創作（漱石氏のいう如き）というのは浅見たるを免れぬ。空想で創作するよりも、自然の不可思議を見出すべきである。自然を解明（インタープリート）するのが芸術の目的である。けれども決して模倣し、記載するのではない。芸術家がその終局の目的に達すべき唯一不二の道は、自己存在の秘訣を悟了するところに存するのである。すなわち内心の実験によるのである。この内心の真実なる実験は常に真実を保たむがために強烈深刻なる情趣を要求し、誇張または減殺をなすのである。冗漫繁雑なる記述説明を嫌うのである。子規の文体の緊張せるはそが生命を有する所以である。

自然は無限である。不可思議である。この自然を最もよく例示して居るものは人間である。而して自然の無限と相似なるは人心の微妙なる作用である。しかも人間は必ず一人にて完成して居る。芸術唯一の要件たる完成統一は人間に於いて最もよく現わされてある。芸術は自然殊に人間の研究から出立せねばならぬ。自然は完成して居る、生命がある。誤謬はつねに吾人の見地より、吾人の偏見より生ずるのである。吾々は作られたものを再現（リプレゼント）するのである。芸術家が創作（クリエート）するのではない、創作せられたるものを再現するのである。創作の意義は前項に述べたる如く、三昧の境に入り、吾人の内心に磅礴（ほうはく）し来る情調の進行動揺のまゝに形式を求むる、いわゆる神来

の興によって製作するに名づけたるに過ぎぬのである。創作を「こしらえる」（漱石）という如き、余りに自覚的なる緩漫の作用の義に解するは、いわゆる低徊趣味者のことである。

「芸術は人に於ける自然の反射である。その鏡をみがくのが主要なる事柄である」芸術家は飽くまで自然に親しまねばならぬ。自然の部分を見るのではない、部分にもまた全体を見るのである。常に心に満ちあふるゝ感情を湛うるのである。心を活動せる新鮮なる情調のもとにおくのである。自然には節奏（リヅム）がある。盛衰があり、生滅がある。無常である。この内部の悲哀に触れて沈痛なる情調のもとに、この自然の動乱を表現するのが芸術最終の目的である。

――評　論・12・アカネ――

明治四十二年（上）

○　文壇の将来に対する覚悟

一般に芸術作家は熱心に創作に従事するときは多少放心の情態になるので、前号にその日本美術評を紹介したオーギュスト・ロダンの如きも、料理屋で隣席の人のところへもって来たオムレツをうっかり半分食べてしまって、はじめて気がついたというようの話がある。一心になって居れば自然細かいことに気がつかなくなる。細かいことに気がつかないのは芸術家の一特徴である。けれども、こゝに大なる注意を要するので、芸術家が一般公衆よりも秀でて居るのもこの点に基くし、また一般公衆よりもかえって俗になるのもこの点に関する微妙なる誤りから起こるのである。高尚な理想を有し、深遠の思考を有して居る芸術家が、無心の天然、動物などに対して非常の愛情を示して居ることが多い。これはいま例を挙げるまでもない。全く素朴のものを愛するのは詩人、芸術家の常である。この一方に深い思考力を有して居って、一方極めて無邪気の他愛もないものを愛するというところに作詩の秘訣がある。この点に注意しないと芸術が堕落する。つまり、高遠の理想（理想というのは深遠な思考を客観化したものゝ意である）と、素朴の自然との間の親しいものであるというのを考えねばならぬ。

さて、この理論を実行する方法をこそいま説かむとするので、理論というものはそれだ

けにして置いては空虚のものになってしまう。その実行の方法として第一に、

自我の念を高めて置かねばならぬ

先輩の議論も、作物も、世間の評判も、または古人の作品および議論も、これを参考するに止めて決してこれに支配せられてはならぬ。詩を作るには自我の念（セルブスト・ゲフュール）を高められた情態に置かねばならぬ。

このことは子規先生の「俳諧大要」にも詳しく且つ力強く説いてあるので、人が何といっても自分でよいと思わなければいかぬという意味をその作句の実験から説明してあった。次には、

自然そのものに親しまねばならぬ

ということを云っておきたい。歌を作るときは、たゞその見聞したまゝを歌えばよい。そうすれば自然は誤謬のないもので、確かりした歌が作られる。自分の頭の中に熟さない、消化されない、外から強迫的に入って来た考え（つまり世間の流行などに動かされた結果である）などで真実の自然を悪く更改するから、生命のない歌が生るゝのである。それゆえ歌は百人百種の体を有すべきで、或る一人を真似るというようなのは断じていかぬ。つまり自我の念を高められた情態において、

古人をも今人をも模倣せない

覚悟が必要である。今こゝに一人の少女が居るとして、唯それをこれは「某工場の一工女である」ところ見、また「これは貴族社会の一人の女である」ところいうように見て居っ

て、一工女であるという概念に支配せられてこれを蔑視し、これは貴女であるという概念によって支配せられ、渇仰するというようなことでは何とも仕方がない。その女の全人格、すなわちその女の生存の意義、すなわち万人に共通なる生存の意義を考えその上にその境遇と過去の経歴、未来の予想とを以てして、更に容貌、智力、感情というようなものを、こう分解的でなく一瞥直覚せねばならぬ。こゝに於いて自然にせよ、人事にせよ、その間に、

非常の多様と同時に唯一の真理

があるということに気がつく。この種類変化の多いのが前に云った素朴の自然で、唯一の真理は高遠の理想である。で、この二つは極めて親しいものであるという事が明瞭になると思う。ゲーテが「わが身を大いなりと、又さながら小さしと感ず」と云ったのも、この現実と理想とに対する、すなわち現実の多様なるものを心中に統一しようとした苦心努力から発した言で、その一代の傑作「ファウスト」の哲学もまたこれに外ならないと思う。日本近世の大聖親鸞も、

慶哉愚禿仰デ惟ハバ樹ニ心ヲ弘誓仏地ノ流ニ情ヲ難思法海ノ
爾者乗ニ大悲願船ノ浮スヘシ光明広海ノ至徳ノ風静カニ衆禍波転ズ即破シ無明闇ノ速到ニ無量
光明土ノ証ニ大般涅槃ノ導メ普賢之徳ノ也可知

超世の悲願きゝしよりわれらは生死の凡夫かは、有漏の穢心はかはらねど心は浄土にす

みあそぶ。
大願海のうちには智愚の波こそなかりけれ、弘誓の舟にのりぬれば大悲の風にまかせたり。
乃由〃如来加威力〃故〃由〃大悲広願力〃故〃獲〃清浄真実信心〃……極悪深重〃衆生得〃大慶喜心〃被〃諸聖尊重愛〃也。
と云われた。その実験をよく味わえばこの間の消息が分ると思う。今は読者諸君の参考に引用したのでこの解釈はせぬ。
つまりこの高遠の理想と素朴の自然との親しさを得ようとするには努力が必要である。粉身砕骨の精進がなければならぬ。芸術家の理想がひとたび人為的のものになって、いわゆる伝習（コンベンション）にすぎない形式になると、こゝで芸術が堕落するのである。月並になるのである。そこで芸術家が一般俗人よりも反って甚しく俗になるのである。むしろそのまゝの自然の方がよくなる。この生命のない空想芸術を破るために自然を以てするので、子規先生の俳句革新、近ごろの自然主義の勃興などもこれである。
……
すべてこの理想、主義、趣味というようなものが内容のない概念的、伝習的、人為的の空虚のものになるのを防ぐには非常なる不断の努力、しかも身を捨て全力を傾注した努力がなくてはならぬ。自己覚醒の不安より出立したる大勇猛心によっての人間勢力および感情の無辺の爆発を要する。生命なき旧文明の圧迫に対し、世界末日の近づけるを自覚した

る狂熱的信念発生の動機によらねばならぬ。それ故に高遠の理想と、素朴の自然との親しみを保つには必ず主義信仰に対する勇猛なる精進が必要である。それ故に、

高遠なる理想と素朴なる自然とを親しからしめむには、

常に精神を緊張興奮せる情態に置かねばならぬ

と思う。さてこの緊張せる精神情態は誰にしても稀有である。稀有である故に最勝のものである。宗教的信仰に対して親鸞聖人が「アヽ弘誓の強縁は多生にも値い難く、真実の浄信は億劫にも得がたし」と讃嘆して居るのもこれと同じ理由である。ゲーテが「美神に陪従せよ、指導する勿れ」と云ったのも芸術の極致の稀有であることを実験した結果であって、更に明白に「あゝこの一瞬」と叫び「一瞬に永久を与うる」と云ったのもこれと同じ意味である。それゆえ吾々は常に向上の道を求め、現在および過去に対して悲観的態度をとり、未来に希望をつないで猛進すべきであると思う。

……

元来成功とか失敗とかいうのは他に目的あっての行動についてこそ云うべきで、それ自身に目的を有して居る文芸上のことに成功や失敗などというものがあるわけはない。こういうのが抑々誤って居る考えであると思う。また人間には普遍的に本来の良心に反対なる慾念の私心があって、いつもその本心を害するというような倫理学的説明は、いづれでもよいとしても、いま文芸上の議論であるからこういう道徳家的見解は文芸にとっては好都合のものではない。元来支那の儒教的精神中その著しく立法的なる思想と、統一完成せる

人心の作用を、諸種の能力（ハーカルティ）に分解する学説とは日本文芸の上に非常な悪影響を及ぼして居るので、元来人間に良心と欲心とがあって相戦って居るというような人為的な、伝習的な、執着的な、そうして徹底しない、窮屈の考えを破ったところに子規先生の文学の新生命はあったのだと思う。

ニイチエに与えしワグネルの書簡

ニイチエの悲劇の由来についての論文に対して、ウルリッヒ・フォン・ヴィラモーヴィツ・メルレンドルフの駁論を見て、ワグネルが一八七二年六月にニイチエに送った書簡である。そのなかでいわゆる文献学者（フィロローグ）の研究法を罵倒して居る。神学科、医科、法科などは牧師、医者、裁判官、弁護士等社会に有用の人物を作って居るのに、ひとり文献学科は再び文献学者を作って文献学者相互にのみ入用の大学教授、高等学校教師らを作るのみで、一国の教化の上に少しも直接の効果がなく、それでも政府では俸給を与えてこの文献学者を養っておく。その考証というものは何も内容のない事柄に勿体をつけるばかりで、真に古代の精神を了解するでもなしに、それを完全の智識だと誇って居る。元来文字の軛から脱するのが真精神を把持する所以であるので、いわゆる学者の研究、しかも余りに純粋の研究などというものは少しも現実の活動に触れない、役に立たぬものの多いのはどこも同じである。

流行と凡庸文芸

全く劣等のものは流行しないから危険でない。なまなかよいものが最も危険である。真

実のものと混同さるゝからである。これが流行する。何故かとなれば目新らしいけれどもその実は古いものか、又は潑剌たる生気が消えかゝったもの、こういうものは第一に一般公衆に容易に了解できるから直ちに流行する。けれども元来平凡のものであるから代用はいくらもある。目新らしいものも慣れゝば飽きてくる。これが流行が一時的である所以で、流行児が最后の勝利者でない所以である。そして社会のために最も力にならぬものは、この中庸平凡の流行文芸である。こういう文学は亡国の文学である。人の目に立つようなことで真実の事業ができるものではない。喝采などを得て居るうちに大切のものを失くしてしまうのである。

文芸に対する経済学的見解

生きて居ることは死につゝあることである。人生は常に変化して居る。この活動し、変化すること、主観的には或る刺戟を受くることが生存の意義である。しかし、活動変化に没頭して居ればその活動変化を明瞭に感得することが出来ぬ。こゝに於いて人間は不変なるものを得むとする。この間にいわゆる価値が生ずるのである。富財の価値は、そが流通の自在と、他物に容易に変形し得る普遍性を有して居る点に存する。すなわち、やゝ常住的の性質を有する点に於いて一般人の追求の目的となるのである。名声もまた一種の常住的、普遍的性質を有する点に於いて一般人の欲求の対象となるのである。又これによって富財その他を得べき方便を得るが故にもよるのである。けれどもこの名利も畢竟無常のもので、一つの方便たるに過ぎぬ。それ自身に目的を有して居らぬ。すなわち名利を常住の

ものとして考えない性質の人間がある。これは天稟の性質である。かくの如き鋭敏な感覚と、因果関係を考察する内的、主観的傾向を有する人間が芸術に向かうので、彼らはこゝに人間能力の制限のもとに達し得らるゝだけの常住なるものを求めむとするものである。これは、美の形式として自然界に顕現する永久の真（エターナル・ウェリティ）である。そが主観に与うる刺戟は、主観を忘我に導き、一定の情調に酔わしむるに至るので、極端な生の発展のもとに死の甘楽を味わしむるものである。この時に於いて芸術家の内心の所有は価値を超絶して居るので、皮相の見を以てその外部を一瞥するときは悲劇的であるけれども、この時に芸術家は内心に勝利の大歓喜を得て居るので、悲劇の真意義はこゝにあるのである。悲劇は破滅の力の表現であり、意志力の表現である。この意志力を客観化して世上の経済的制限のもとに蠢動して居る社会生活に瀰散せしむるときすなわち、芸術家が客観的態度をとるとき広義の喜劇が製作せらるゝのである。悲劇は主観的で、喜劇は客観的である。動揺変化は生命の直観的性質である。主観的月並俳句に対する子規の客観的俳句、喜劇的戯作小説に対する悲劇的色調を帯びし自然主義派小説はともに生命がある。いわゆる旧派の客観的和歌および小説などに対する改革としては子規の俳句より得たる客観的傾向はある点に不適当のものであった。依然改新時代の俳句の客観的傾向を以て、現代の和歌小説に対せむとするは、伝習外形の束縛のもとに文芸の生命を断ってその死屍をさらさしめむとするもの、文芸を堕落せしめて相対的、差別的、比較的、部分的の無常なる経済的情態のもとに呻吟する俗世間の一現象たらしめむとするものである。この腐敗し

かゝった臭いと、死にかゝった活動のない外形とは俗衆の媚を買うに足りるもので、市井の賤妓を美なりとする如き意味に於いて俗衆の喝采を博するのである。流行するのである。そうして最も悲しむべきは一時の外部的繁栄の瞬間に、永久生命の源泉たるべき根柢が枯死するのである。この文芸を名利の俗世間の現象とならしむるのは作者の内心にまた名利を求めるようになるからで、いわゆる相互作用である。

――評　論・1・アカネ――

○

人生は悲しいには違いない。けれども人心の奥秘に触れない人間のために一層悲惨になる。世に悪人があるならば、それは苦痛を知らぬ人だ。苦痛は闇である。その闇から光明が生れる。幸福な人はこの闇の甘ましさを知らぬ。そうして低徊して居る。意志がない。意志のないものは死んだ物質――すなわち悪である。人には悪意などというものはない。悪意がないから、盲動の結果が悪になるのだ。悪人の所業は善人を殺す。それは山上から石が転がって来て人を殺すようなものだ。人を殺した石を憎むべからざるように、悪人も憎むには足らぬ。物質である。憐れむにも足らぬ。石を割るように割ってしまってもよい。

――小説　古き家・2・アカネ――

三井甲之選集

昭和40年7月20日発行

定価 ¥200

編者　宮崎五郎

発行者　本村松治郎

発行所　しきしまのみち会大阪支部
大阪府枚方市香里丘7丁目6の11

宮崎　五郎　編

限定三〇〇部

無限生成（三井甲之書翰集）

B6版　二〇〇頁
価二〇〇円　郵四〇円

しきしまのみちとたなすゑのみちの関連を詳説し、このみちひとすじに生きぬきし風雪五十年の回顧と、苦難にたち上る日本と日本民族の未来につなぐ光明の展望――地上生活への袂別を永遠の別離たらしめざらむとする偉大なる哲人の呼吸を伝うる珠玉の書翰。

文中長詩一篇、短詩十三篇、和歌九十二首、俳句五句、墓碑銘「石ニシルスコトバ」を点綴し、近づく臨終を予感して編者に口授せられししきしまのみち秘伝の筆録にむすぶ永久記念文献。

東京世田谷郵便局私書函34号
発行　手のひら療治研究会
振替　東京73999番

かつては正岡子規が唱道し、三井甲之が実践した連作和歌のみちを三十余年歩みつづけた著者の自選歌集。

昭和四年以降三十九年春までの六千数百首のなかから選りすぐった作品三千余首を収む。

〝かねて香でん歌集と覚悟していたものが生きてゐるうちに陽の目を見やうとは思はなかった〟

―著者―

B6版　四〇〇頁
写真・筆蹟
金文字クロス表装
箱入
二〇〇部限定版
価三〇〇〇円（郵共）

自選
歌集

風（かぜ）

宮崎五郎

歌集〝風〟にふれて

喜島　康

手に持つにたえないほど重量感のあるご本です。この歌集を読む人はほんとうに選ばれた方だと思います。これに触れる人は、お守りを持ったと同じで、将来きっと幸せにめぐり逢う運命の人だと思います。

感激に心が波立ち、読んでいるうちに涙があふれ、人まえでは押えるに苦しいほどです。しみじみと人生の淋しさを味わいながら、その中に限りない喜びを見出すご本です。

文字に記録されたクラシック音楽とも言えると思います。

発行　しきしまのみち会大阪支部

取次　手のひら療治研究会

ことばにより神秘を味わう新時代の書

既刊　第一輯――第七輯（以下続刊）

各巻　B6版　七〇頁　価一五〇円　郵三〇円

いのちのあゆみ　宮崎五郎

いのちのあゆみを読んで

喜島康

お言葉のひとつひとつがむづかしいのに、読んでゆくうちにしっくりと胸に落付く御本です。

今まで有名な宗教や心霊の書物もいくつか読んでみましたが、分り易く書いてあるのに、スグ眉間が痛くなります。眉間が痛むのは気枯です。心のしこりがひとつづつ融けてゆく詩です、厚い氷や雪が太陽の光に融けるように。

人はみんな気枯を持っています。それを解きほぐし、祓う最高の詩です。永遠の安らぎを与える書物です。先生と共に息づき、先生の亡きあとに光を残す書物です、〝いのちのあゆみ〟は。

発行　手のひら療治研究会